

入楞伽經「無常品」の原典研究

安  
井  
広  
済

# 目次

## 序

## 言

## 梵文和訳

(1) 意成身 (manomaya-kāya) について……………	七〇	(12) 束縛と解脱について……………	七〇
(2) 内の五無間業と外の五無間業について……………	七二	(13) 「法の自性は分別される如くに存在しない」という教説の意味。「一切法は不生である」と説くべきでないこと……………	七三
(3) 仏陀たること (buddhata) について……………	七三	(14) 唯識が、所知にたいする無知でなく、知であること……………	七七
(4) 釈迦牟尼仏と過去の諸仏との平等性……………	七四	(15) 究極の理趣と教説の理趣……………	九八
(5) 不説 (avacana) が仏説であることの意味……………	七五	(16) ローカーヤタ (Lokāyatika) について……………	一〇〇
(6) 有見と無見とについて……………	七七	(17) 涅槃について……………	一〇八
(7) 究極の相 (svasiddhāntanayalakṣaṇa) と教説の相 (desanānayalakṣaṇa) とについて……………	七九	(18) 仏陀たる自性 (svabuddha-buddhata) ……	一一三
(8) 虚妄分別の生起と止滅とについて……………	八一	(19) 不滅不生の意味……………	一二六
(9) 語 (rūpa) の如くに意味 (artha) を取るべきでないこと……………	一五	(20) 不滅不生——因縁の和合、聚合……………	一二三
(10) 智 (jñāna) と識 (vijñāna) とについて……………	一七	(21) 無常について……………	一二七
(11) 外道の転変論について……………	一八		

## 梵文訂正

## 序 言

入楞伽經は、般若經のような空不可得の否定に始終する素朴な經典でなく、また、華嚴經のような文学的な象徴的表現に富んだ經典でもなく、大乘仏教の多種の重要教義を統一なく雜然とかきとめた覚え書きのような經典である。ここに和訳した「無常品」の品名にしても、無常品の最後に無常についての教説があるところから、名づけられているにすぎない。以下の無常品の内容を見てわかるように、入楞伽經には、空の思想や唯識の思想から、仏身、涅槃、過去仏などの思想、さらに、外教の思想にいたるまで、さまざまな教義的問題が前後統一なくとりあげられている。しかし、入楞伽經は、それだけにまた、異常なまでに豊富な内容をもっているわけであり、大乘仏教の思想の研究にとって大きな価値をもっている。入楞伽經は、大乘仏教思想の一つの大きな要集である、といつてよい。

入楞伽經は、大乘仏教の多種の教義を含むところから、大乘經典としては比較のおそい時期に成立したものである。竜樹以後、無着・世親の時代にいたるごろまでに成立した中期大乘經典とされるのが通説である。無常品を見ても、これらのことは、直ちに気づかしめられる。

たとえば、「無常品」(すゐじょう)を見ると――如来が現等覺した夜より槃涅槃する夜にいたるまで、その間に、如来は一字も宣説せず、また、宣説しないであろう。不説が仏教である。▽ということが、世尊によって説かれておりますが、何を密意して、如来応供正等覺者によって△不説が仏説である▽ということが、いわれるのでしょうか。――というマハーマティの質問がある。これは、△寂恵よ、如来は無上正等覺をさった夜から、涅槃する夜にいたるま

で、その間に、一字も説かず、宣説せず、また、宣説しないであろう。√という、宝積經「密跡金剛力士會」(大正、一一、五五、中)の教説を予想してのことであろう。この宝積經の教説は、中觀學派のチャンドラキールティが「中論註」の第十八章に引用するところの、よく知られた教説である。また、「無常品」(p. 169)を見ると、——マハーマティよ、このことを密意して、わたくしは八むしろ、実に、須弥山ほどの我見を起すとも、無を有りとする増上慢の人の空性の見解たらざれ。√と説いた。——という世尊の教説がある。これは、八須弥山ほどの我見を起すとも、増上慢の空性の見解たらざれ。√という、宝積經「普明菩薩會」(大正、一一、六三四、上)の教説を予想してのことであろう。この宝積經の教説は、また、チャンドラキールティの「中論註」第十三章に引用されるところの、よく知られた教説である。したがって、入楞伽は、宝積部の經典すべてとはいえないにせよ、これらの經典より後出の經典であることは明らかである。さらに、「無常品」(p. 169)を見ると——八知が所縁の境を把握しないとき、そのとき、唯識に住することがある。「すなわち」、識の所取が無なるによって、能取には、また、「所取を所縁の境として」能取するはたらしがない。……云々√ということが、世尊によって説かれておりますが、——というマハーマティの質問がある。これは、何經の教説をさすか明らかでないが、この教説は、世親の「唯識三十頌」の第二十八頌である八識が所縁を把握しないとき、唯識に安住する。所取が無いとき、それを能取しないから。√という言葉に殆んど一致する。これは、入楞伽經が、唯識説を伝統しつつ、しかも、世親に年代的に近いことを物語るもののように思われる。

入楞伽經には、宋訳、魏訳、唐訳の三本の漢訳があるが、いずれも、訳文が簡固で読みにくい。唐訳が比較的読みやすいが、梵本と対照してみると、かなり訳文がルーズであり正確でない。この点、チベット訳は、よく梵本に一致し、わたくしは、これの助けによって梵文を解読した。また、チベット訳に存する智吉祥賢(Jhāṇasītibhadra)の「入楞



「伽經註」は、後期の仏教の種々の要素がはいった註釈書であって、かならずしも文章に即した優れた註釈書ということができないが、本文の内容を明らかにする上に非常に有益である。ことに、チベット訳と智吉祥賢の註釈とによって、梵文の本文にしばしば訂正すべき誤写のあることに気づくのであって、入楞伽經の研究は、このような厳密な原典研究から、あらためて第一歩をふみだすべきであるように思われる。実際、わたくしは、チベット訳と智吉祥賢の註釈とによって、全体の訳文の上に、かなりの読みやすさと正確さとを増すことができた、と考えている。すでに、故鈴木大拙博士の英文の翻譯、故泉法環教授の和訳、光寿会より出された和訳があるにもかかわらず、これが、あえて「無常品」の和訳を以下に発表する所以である。以下の和訳には、一々内容の見出しをつけた。なお、南条本の頁数をいれているが、改行は内容にしたがって自由にした。また、末尾に梵文の訂正をつけたが、なるべく南条本の脚註にないものをあげた。なお、付記しておくが、筆者は入楞伽經「食肉品」の梵文和訳を大谷学報第四十三卷第二号に発表している。

## 梵文和訳

### (1) 意成身 (manomaya-kāya) じこじつ

<sup>p. 126</sup>そのとき、実に世尊は、さらにまたマハーマテイ菩薩摩訶薩に、次のようにのたまうた。「マハーマテイよ、わたくしは、意成身の状態の差別相を説くであろう。これを、汝はよく聞き、また、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「善きかな、世尊よ。」と、マハーマテイ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

世尊は、かれに、次のようにのたまうた。

マハーマテイよ、意成身には三種がある。三種は、何かといえば、すなわち、「禪定の安樂に入る意成身」(sama-dhīśukhasamāpatti-m.k.)<sup>126</sup>、「法の自性を了解する意成身」(dharmaśvabhāva-vābodha-m.k.)<sup>127</sup>、「聖なる」種姓と俱生する行作の意成身」(nikāyasaḥajasaṃskarakriyā-m.k.)<sup>128</sup>である。もうもののヨーギンは、初「地」より上々に地の相を遍知して、「それらを」証得する。この中、マハーマテイよ、「禪定の安樂に入る意成身」とは何かといえば、これは、第三、第四、第五地において、自己の種々の心の遠離に住することによって、心の海に生起する識浪を相とした安樂に入る意識がおこらず、自心所現 (svacittadīṣya) の境の有と無とを遍知するから、意成身といわれる。<sup>p. 127</sup>このなか、「法の自性を了解する意成身」とは、何かといえは、これは、第八地において、幻等の法が無相 (mirabhāsa) であることを考察し了解することによって、心の所依を転じ、如幻三昧を得、また、その他の諸三昧の門を得ることによって、多くの相と力と神通の華によって莊嚴せられ、意の如く迅速であり、幻と夢と色像の如く、大種所造でなく

して、大種と大種所造に相似し、一切の色の種々の肢体をもち、一切の仏国土の集会に行くところの身であり、「これは」、法の自性を了解するから意成〔身〕といわれる。この中、「聖なる」種姓と俱生する行作の意成身」とは、何かといえ、これは、一切の仏法の自内証 (pratyātmadhigama) である安樂の相を了解するから、「聖なる」種姓と俱生する行作の意成〔身〕といわれる。ここに、マハーマティよ、汝は、三身の相を考察し了解することを修行しなければならぬ。ここに、次のように説く。

(1) わたくしにとって、大乘は乗でなく、声でなく、文字でなく、諦でなく、解脱でなく、実に、無相の行境でもない。

(2) しかし、大乘は乗であり、禪定に自在なる力をもち、種々の意成身は、自在の華によって莊嚴されている。

## (2) 内の五無間業と外の五無間業について

そのとき、<sup>マ180</sup> 実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、またまた世尊に次のようにいった。「世尊よ、善男子もしくは善女人が五無間 (pañca-anantaryāni) に墮罪して阿鼻地獄のものになる〔という〕、世尊によって説かれた、かの五無間とは何でしょうか。」と。

世尊はのたもうた。「されば、實に大慧よ、汝はよく聞き、また、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ。」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

世尊は次のようにのたもうた。

さて、マハーマティよ、五無間は何かといえ、すなわち、母と父と阿羅漢を殺すこと、僧伽を破ること、如来の

身において害心をもって血を出すこと、である。

このなか、マハーマティよ、もろもろの衆生の母は、何かといえば、すなわち、喜貪 (nandī-rāga) にともなわれた後有を引く渴愛であり、「これが」母性として住する。無明は、「六」処の城を生ずるものであるから、父性として「住する」。母と父とのこれら兩者を完全に根絶することによって、母と父との殺害がある。このなか、鼠の毒のような烈しい怒りの性質をもった敵にひとしいもろもろの随眠を完全に破壊することによって、阿羅漢の殺害がある。このなか、僧伽の破壊は、何かといえば、すなわち、相互に相が異った「五蘊」の積集を完全に根絶することによって、僧伽の破壊といわれる。マハーマティよ、自「相」と共「相」、および、外界の唯自心所現を了解する八識<sup>八識</sup>身を、三解脱無漏の害心によって完全に根絶することによって、識の仏 (vijñāna-buddha) において害心をもって血を出すことがあり、「これが」、無間の行為あるもの、といわれる。これらは、マハーマティよ、内的 (ādhyātṃika) なる五無間であり、これらに墮罪して、善男子もしくは善女人は、「五」無間の行為あるものとなり、現証の法 (abhisamita-dharma) あるものとなる。

さらにまた、マハーマティよ、わたくしは汝に外的 (bāhya) なる「五」無間を説くであろう。これらを説くことによって、汝と余の菩薩たちは未来の時に疑惑をおこさないであろう。さて、言教の中に説かれた「五」無間は何かといえ、すなわち、それらに墮罪して、三解脱のいづれにも現証がないところのものである。ただし、「五無間をする」変化された神力の者の現証は例外である。実に菩薩の神力によって、あるいは、如来の神力によって、変化された神力の声聞が、無間の行為をする人の悪作があるときに、その人の悪作の見解をはなれしめ、また、努力をすてたものの悪作をなからしめるために、勸教をするであろう——と考えて、わたくしは、変化された神力の者の現証を説

く。マハーマティよ、唯自心所現を了解し、身 (deha) と受用 (bhoga) と依処 (pratiṣṭhā) の状態の分別「を遠離すること」や、我我所の執着を遠離することを知見して、いつか或る時に、善友に会い、余の趣の境界において、自己の分別の過失から解脱する以外に、〔五〕無間をなすものの現証は絶対でない。ここに次のように説く。

- (3) 実に、渴愛は母なりと説かれる。かくの如くに、無明は父である。識は境を了知するから、仏なりと説かれる。
- (4) 実に、睡眠は阿羅漢であり、五蘊の聚は僧伽である。無間とは間隙を断つからである。業には無間があるであろう。

### (3) 仏陀たケイユ (buddhata) ニヒンシ

さらにまた、マハーマティはいった。「世尊よ、諸仏世尊の仏陀たること (buddhata) がどのようなものであるかを、わたくしに示して下さい。」と。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、法と人との無我を了解し、二つの障 (avarāṇa) を遍知し了解し、二つの死 (cyuti) を得、二つの煩惱 (kleśa) を断ずるが故に、マハーマティよ、諸仏世尊の仏陀たることがある。マハーマティよ、これらの性質を得ることによって、声聞と独覺に仏陀たることがある。されば、それ故に、マハーマティよ、わたくしは一乗 (ekayāna) を説く。ここに次のように説く。

- (5) 二無我「を了解し」、煩惱「を断じ」、同じく、二障「を遍知し」、不可思議なる変易の死を獲得することによって、如来あり。

(4) 釈迦牟尼仏と過去の諸仏との平等性について

実に、<sup>p.141</sup>そのとき、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に次のようにいった。

△過去の一切の諸仏は、実に、我れなり。▽、また、△種々の本生の生起は我れなり。▽、すなわち、△その時、その節、「我れは」、頂生王、象、鸚鵡、帝釈、ヴァーサ、妙眼なり。▽という、このような百千の本生 (jātaka) が世尊によって説かれておりますが、何を密意して (samdhaya) 世尊は集会の中に行つて「かくの如きことを」述べたものなのでしょうか。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覺者は衆会の中に行つて、四種の平等 (samata) を密意して、「我れは、実に、その時、その節に、拘留孫 (krakucchanda)、迦那迦牟尼 (kanakamuni)、迦葉波 (kāśyapa) であった。」という語を發するのである。どのような四種の平等を密意してかといへば、すなわち、字平等 (aksara-samata) と語平等 (vak-s) と法平等 (dharma-s) と身平等 (kāya-s) とである。マハーマティよ、これら四種の平等を密意して、もろもろの如来応供正等覺者は集会の中に行つて語を發するのである。この中、マハーマティよ、字平等はなにかといへば、すなわち、わたくしの名が仏であるという、それと同じ「仏という」字をもって、それら諸仏世尊にそれらの「仏という」字があるときに、マハーマティよ、それらの字は字の自性として区別されないから、これがマハーマティよ、字平等である。この中、マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覺者の語平等はなにかといへば、すなわち、わたくしの語の分別は六十四相の梵の音声をもって生起する。マハーマティよ、もろもろの如来応供正等覺者の

語の分別も、実に同様に、六十四相の梵の音声をもって生起し、迦陵頻伽の梵の音声の自性として不減不増 (anūṇa-anadhika) であり、無差別である。この中、身平等はなにかといえ、すなわち、わたくしとかれら如来応供正等覺者とは、法身 (dharma-kāya) として、また、「三十二」相「八十種」好の色身 (rūpa-kāya) として、平等であり無差別である。ただ、所化「の衆生」のために、それぞれの衆生の趣の差別にしたがって、もろもろの如来が種々の色相 (rūpa) を現するのを除く。この中、マハーマティよ、法平等とはなにかといえ、すなわち、かれら「如来応供正等覺者」とわたくしとは、三十七菩提分法の証得者である。マハーマティよ、これら四種の平等を密意して、もろもろの如来応供正等覺者は、衆会の中において、「本生にかなする」語を発するのである。ここに次のように説く。

(6) 迦葉波と拘留孫と迦那迦牟尼も我れなりとわたくしはもろもろの勝者の子に語る。ひとしく平等であるから、

(5) 不説 (avacana) が仏説 (buddha-vacana) であることの意味

さらにまた、マハーマティはいった。

八如来が現等覺 (abhisambuddha) した夜より槃涅槃 (parinirvāṇa) する夜にいたるまで、その間に、如来は一字も宣説せず、「また」宣説しないであろう。不説が仏説である、ということが、世尊によって説かれておりますが、何を密意して、如来応供正等覺者によって八不説が仏説である、ということが、いわれるのでしょうか。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、二法を密意して、このことがわたくしによって説かれる。二法「を密意して」とは、何かといえ、すなわち、「自証の法性」(pratyātma-dharmatā) と「本住の法性」(paurāṇa-sthiti-dharmatā) とを密意してで

ある。マハーマティよ、この二法を密意して、このことがわたくしによって説かれるのである。

この中、「自証の法性」の密意とは、なにかといえば、すなわち、もろもろの如来によって証得されたところの、言語の分別をはなれ、文字と二つの境 (*gatidvaya*) とをはなれた、自内証の行境なるものが、わたくしによっても証得されたものであり、不減不増なるものであることである。

この中、「本住の法性」とは、なにかといえば、すなわち、マハーマティよ、かの古い「本住の」法性の道は、金と銀と真珠の産地の如し。マハーマティよ、法界の住は、もろもろの如来が世に出ずるも、もろもろの如来が世に出でざるも、住している。マハーマティよ、それらもろもろの法の法性 (*dharmatā*) と法住性 (*dharmasthitā*) と法決定性 (*dharmaniyamata*) とは、古城への道の如し。たとえば、マハーマティよ、或る人が曠野をさまようて、規則正しい道の随入している古城を発見するときに、かれはその都城へはいるであろう。「かれが」そこにはいつて、都城に住して、都城の事用と楽とを受けるとき、マハーマティよ、<sup>p.14</sup>「かれが」都城にはいつた、かの道と都城の種々相は、実に、かの人の生じたものである、と汝は思ふか。「マハーマティは」いつた。「世尊よ、そうではありません。」世尊はのたもうた。「実に、マハーマティよ、かくの如くに、わたくしともろもろの如来とによって証得された、かの法性と法住性と法決定性と如性と実性と真性とは住する。」故に、マハーマティよ、「如来が現等覺した夜より般涅槃する夜にいたるまで、その間に、如来は一字も宣説せず、また、宣説しないであろう。」ということが、わたくしによって説かれる。ここに、次のように説く。

- (7) 証得の夜より般涅槃〔の夜〕にいたるまで、その間に、わたくしにより顯示された何ものもなし。
- (8) 自証法と本住法とを密意して、わたくしは「不説が仏説である」と語る。かれら諸仏と、わたくしとによって



差別される何ものもなし。

(6) 有見と無見について

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に「次のように」請うた。「世尊よ、わたくしと他の菩薩摩訶薩が無 (nastiva) と有 (astiva) とをはなれ、速かに無上なる正等覺を現等覺することができまうに、一切法の無と有の相をわたくしに示してください。」と。

世尊<sup>215</sup>はのたもうた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、思念せよ。わたくしは汝のために説くであらう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は、次のようにのたもうた。

マハーマティよ、この世間の人は二に住している。すなわち、有に住するものと、無に住するものであり、「かれらは」有 (bhava) と無 (abhava) との欲樂の見解におちいり、非出離 (nīhcarāṇa) において出離の理解をもっている。この中、マハーマティよ、いかにして、世間の人は有に住するものであるかといえ、すなわち、現に存在する因縁によって世間が生じ、現に存在しない「因縁」によって「世間が生ずるの」ではなく、現に存在し、かつ現に生じているものが生じ、現に存在しないものは「生じ」ない「と世間の人は考えるからである」。マハーマティよ、かれ（世間の人）が、かくの如くに諸法の有を語るとき、「かれは」因縁と世間とが無因にして有りと論ずるものである。この中、マハーマティよ、いかにして、「世間の人」は無に住するものであるかといえ、すなわち、「世間の人は」貪欲と瞋恚と愚痴「の存在」有」を認めて、しかも、貪欲と瞋恚と愚痴の有の無を考える。マハーマティよ、

無に住する世間の人は」、「諸法が」有の相 (bhāva-lakṣaṇa) をはなれているから、諸法の有を許さず、また、「仏と声聞と独覺とが」有の相をはなれたものであるから、仏と声聞と独覺とに貪欲と瞋恚と愚痴と「の有」を許さない。

「さらにまた、世尊はのたもうた。」「有り」といい、「無し」という、この中、マハーマティよ、いずれが破壊者 (vānāṣika) であろうか。」と。マハーマティはいった。「世尊よ、それは、貪欲と瞋恚と愚痴と「の存在」を認めて、後から「それらを」許さないところのものであります。」と。

世尊<sup>prabhu</sup>はのたもうた。

マハーマティよ、よきかな、よきかな。マハーマティよ、このように汝が語るとき、また、実に、汝はよし。マハーマティよ、ただに貪欲と瞋恚と愚痴の存在の無によって「それらの」破壊者になるばかりでなく、「それらの無によって」、仏と声聞と独覺の破壊者にもなる。これは何故かといえ、すなわち、もろもろの煩惱は内的にも外的にも不可得であり、一としても異としても「不可得」であるからである。実に、マハーマティよ、貪欲と瞋恚と愚痴とは身体のないものであるから、内的にも外的にも不可得である。マハーマティよ、貪欲と瞋恚と愚痴との存在を許さないことによって、仏と声聞と独覺との破壊者になる。それら仏と声聞と独覺とは「煩惱の中にありながら」本来解脱している。所縛「がなく」能縛の因がないからである。しかし、マハーマティよ、所縛があるときに、能縛があり能縛の因がある、とこのように語るとき、マハーマティよ、破壊者になる。これが、マハーマティよ、無の相である。マハーマティよ、このことを密意して、わたくしは、「むしろ、実に、須弥山ほどの我見を起すとも、無を有りとする増上慢の人の空性の見解たらざれ」と説いた。マハーマティよ、無を有りとする増上慢の人は、実に破壊者である。

また、自「相」と共相の見解におちいった考え方の人が、唯自心所現の存在をみとめず、みとめないために、外界

の存在が無常であるという学説 (darsana) によって、「本来実には」分別と文字とを離れた蘊処界が、刹那に展転し差別して、相続・連続をもつて生起し滅する、と考えるときに、またまた、「かれは」破壊者である。ここに、次のように説く。

(9) 心の境 (gocara) があるかぎり、「有り」といい「無し」という二辺がある。「しかし」、境が滅するとき、完全に心が滅する。

(10) 境に執著しないとき、心の滅がある。真如の自体は、聖なる人々の境の如くに存在する。

(11) なんらかが先に無くして生じ、しかも、生じおわって滅し、あるいは、諸縁によって「有り」、また「無し」という、かくの如きことは、我れの教説に存在しない。

(12) 外道によっても、諸仏によっても、我れによっても、他の誰かによっても、諸縁によって有は立てられない。いかにし、無が存在しようか。

(13) 或人により、諸縁によって有が立てられるとき、「そこに」なにもものかの無がある。「ものの」生起を論ずる悪しき見解によって「有り」、また「無し」と分別される。

(14) 何物もうみだされず、何物も滅せられないときに、世間が寂滅して見られるから、そこに、有と無とはおこらない。

(7) 究極の相 (syasiddhanta-nayalakṣaṇa) と教説の相 (desana-nayalakṣaṇa) とについて

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に「次のように」請うた。<sup>p.148</sup>「世尊よ、究極の相

(siddhanta-nayalakṣaṇa) をわたくしに示してください。善逝よわたくしに示してください。如来応供正等覺者よ、わたくしに示してください。最上なるものよ、わたくしに語ってください。究極の相がよき弁別をもって開明されまうときに、それによって、わたくしと他の菩薩摩訶薩とは、その究極の相に通達し、速かに無上なる正等覺を現等覺し、一切の究理者と外道とに導かれまいでありましょう。」と。

世尊はのたもうた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、適切に思念せよ。わたくしは汝のために説くであらう。」と。「よきかな世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は彼れに次のようにのたもうた。

マハーマティよ、一切の声聞と獨覺と菩薩との究極の相は二種である。すなわち、究極の相と教説の相 (dṛṣṭānta-naya) とである。この中、マハーマティよ、究極の相は、すなわち、自内証の独自の相であり、言語の分別と文字とをはなれ、無漏界の証智を得、自内証の自相をもち、一切の究理者と外道と魔とを遠ざけ、それら〔究理者と〕外道と魔とをほろぼして、自内証の光をいだす。これが、マハーマティよ、究極の相である。この中、教説の相は、なにかといえ、すなわち、種々の九分教 (navatāṅga) の説示であり、異と不異と有と無との主張をはなれ、善巧方便の方法をさきとし、もろもろの衆生に教説として顯現 (avatāra) し、<sup>149</sup> 信解されるにしたがつて、かれらにそれを示す。

これが、マハーマティよ、教説の相である。マハーマティよ、汝<sup>149</sup>と他の菩薩摩訶薩はこれを修学すべきである。ここに次のように説く。

(15) 究極〔の相〕と〔教説の〕相とは、実に、自内証 (pratyakṣa) と言教 (śāstra) とである。弁別智 (vibhāga-jñā) を見る人々は、究理の力にしたがわない。

(16) もろもろの愚人によって分別されるが如く、真実是有 (bhava) として存在しない。しかし、実際にして究理論者は解脱を無とみとめるのか。

(17) かれら二人は有為を生と滅との結合として観察する。人々は二見を増上し、顛倒して「真実を」見ない。

(18) 意 (manas) をはなれた涅槃、この一法こそ真実である。芭蕉と蘊と幻の如くに分別されたものとして世間を見るべきである。

(19) 貪欲も瞋恚も愚痴も存在せず、人 (pudgala) も存在しない。実に、渴愛によって生じた諸蘊が、夢の如くに存在する。

(8) 虚妄分別の生起と止滅とについて

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に「次のように」請うた。「世尊よ、虚妄分別 (abhutaparikalpa) の相をわたくしに示してください。善逝よ、わたくしに示してください。世尊よ、いかにして、いかなる、誰によって、何について、現に生起している虚妄分別は生ずるのでしょうか。〔また〕、世尊よ、虚妄分別、虚妄分別といわれるとき、世尊よ、いかなる法の名称が、すなわち、虚妄分別といわれるのでしょうか。あるいは、何を分別するときに、虚妄分別であるのでしょうか。」と。

世尊はのたもうた。<sup>p. 18</sup>「よきかな、よきかな、マハーマティよ。汝が、このような請うべき義を考え、多くの人々の利のため、多くの人々の安楽のため、世間の哀愍のため、もろもろの天人と、もろもろの人の群集の義のため、利のため、安楽のため、尽力するのは、実によきかな。実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくし

は汝のために説くであろう。」と。「よきかな世尊よ。」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は、かれに次のようにのたまうた。

マハーマティよ、種々雑多の境にたいする虚妄分別の執着から、人々の現に生起している「虚妄」分別は生起する。すなわち、マハーマティよ、所取、能取の執着に執着し、唯自心所現を了解しない思想をもち、また、有と無の見解の主張におちいり、外道の見解を分別する習氣を増上する人々の、外界の種々の境を把握する執着と我我所の執着とから、「虚妄」分別となぜけられる現に生起している心心所の聚合 (kalpa) が生起する。

マハーマティはいった。

ところで、たとえ、世尊よ、——種々雑多の境にたいする虚妄分別の執着から、人々の現に生起している「虚妄」分別が生起するならば、すなわち、有と無との見解の主張におちいり、所取・能取の外道の見解の分別を増上する人々の、外界の種々の境を把握する執着と、唯自心所現にたいする無知と、有と無との種々の存在の執着とから、「虚妄」分別となぜけられる現に生起している心心所の聚合が生ずるにせよ、——世尊よ、有と無の主張におちいった外界の種々の境の相が、「勝義として」有無をはなれ、「有無の」見解の相をはなれている如く、世尊よ、「虚妄分別の」勝義が、知識 (pramāṇa) と感覺器官 (indriya) と喩 (dīṣṭānta) と因 (hetu) の支分の相をはなれているならば、世尊よ、一方で、種々の虚妄の境の存在の適用を考えるばあいには、分別が生じ、しかも、「他方」、勝義の相の適用をかんがえるばあいには、分別が生じないのは、どうしてですか。世尊よ、「一方で生じ、他方で「生じ」ない」というときは、あなたは、有無の主張の執着と不平等因 (vīṣama-hetu) の論義との過失におちいるではありませんか。また、虚妄分別の見解が生ずるといときは、種々雑多の幻の支分の人によって出来上った一つの像の如くに、分別に

よって種々の相をかんがえながら、有無の分別をはなれるから、ローカーヤタ (Lokāyāta) の見解と思想におちいるではありませんか。

世尊はのたもうた。

実に、マハーマティよ、分別は生ずることも滅することもない。これは何故かといえ、すなわち、有・無として分別が生起することがなく、また、外に見られるものが存在せず唯自心所現であると了解されるから、マハーマティよ、分別は生ずることも滅することもないのである。しかし、マハーマティよ、もろもろの愚人は自心の種々の分別によって分別し、種々の存在の相に執着するから、先心から生ずることを本性とする (prakṛtyā-pravṛtṭi-pūrvaka) 分別が生ずる、とわたくしは説くのである。「このように説かなければ」、実にマハーマティよ、もろもろの愚夫異生は、自己の分別の心のみと了解し、我我所の執着の見解を滅し、果と因と縁〔の執着〕の過失を滅し、唯自心を了解することによって心と思念とを転じ、一切の地に通達し、五法と〔三〕性と実体 (vastu) と見 (dṛṣṭi) と分別とを滅した如来の自内証の行境を、どうして得ることができであろうか。それ故に、マハーマティよ、種々の虚妄の境に執着するから分別が生じ、自己の種々の分別の境の如実の意味を遍知するから解脱する、とわたくしはいうのである。ここに、次のように説く。

(20) 諸因と諸縁とによって世間が生ずるといふ人々は、四辺と結合した人々であり、わたくしの理趣を知る人々でない。

(21) 愚人たちによって分別される如く、諸縁と諸因とによって、世間は有として生ぜず、無として生ぜず、いずにも有無はない。

- (22) 有にあらざ、無にあらざ、有無にあらざ、と世間を觀ずるとき、心を轉じて、無我を証得する。<sup>p. 153</sup>
- (23) 縁生(pratyaya-sambhava)の故に、一切の存在は不生である。一切の縁は果(kārya)であり、果より有(bhava)は生じない。

- (24) 二果の過失におちいるから、果より果は生じない。二「果」の過失があるから、果中に法は得られない。

- (25) 能縁と所縁とを離れたものとして有為を見るときに、無心(nicitta)なる唯心を、わたくしは唯心と語る。

- (26) 「唯」(mātra, tan-mātra)は自性(svabhāva)の姿であり、縁による存在とはなれている。究極の存在は最上なる梵(Brahman)であり、これを「唯」とすると、わたくしは語る。

- (27) 実に、アートマンは仮名有(prajñapti-sat)としてあり、実有(dravya-sat)として存在しない。かくの如く、諸蘊の蘊たることは、仮名としてあり、実体として存在しない。

- (28) 平等(samata)は四種類である。すなわち、相(lakṣaṇa)と因(hetu)と器世間(bhājana)と無我との平等である。実に、「これらは」、ヨーギンの四種類の觀行である。

- (29) 一切の理解をしりぞけ、所分別と能分別とをはなれ、不可得であり、また、実に、不生であることを、唯心であると、わたくしは語る。

- (30) 有にあらざ、無にあらざ、有無をはなれ、同じく、心をはなれるときに、唯心であると、わたくしは語る。

- (31) 真如(眞如)と空性の際(koti)と、涅槃と法界と種々の意成身とを唯心であると、わたくしは語る。

- (32) 分別の習気によって束縛された種々のものは、心より生じたものである。もろもろの人々にとって外界が顯現する。しかし、実に、世間的なるものは唯心である。



33) 外に見られるものは存在しない。心が種々に見られる。身 (deha) と受用 (bhoga) と依処 (pratiṣṭhā) とを唯心である、と、わたくしは語る。

(9) 語 (rūṭa) の如くに意味 (artha) を取るべきでないこと

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に次のようにいった。「また、世尊によって、菩薩摩訶薩と余の人々は、語 (rūṭa) の如くに意味 (artha) を取るべきでない、といわれました。しかし、どうして、世尊よ、菩薩摩訶薩は、語の如くに意味を取るべきでないのですか。語とは何であり、意味とは何でしょうか。」と。

世尊はのたもつた。「されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

世尊はかれに次のようにのたもつた。

この中、「語」とはなにかといえ、マハーマティよ、すなわち、声と文字との結合の分別 (vāg-akṣara-samnyoga-vikalpa) であり、齒と頬と顎と舌と唇の腔より発出された相互〔依存〕の言 (jāpa) であり、分別の習気を因とするものが、「語」といわれる。この中、<sup>p. 165</sup>「意味」とは、また、マハーマティよ、なにかといえ、すなわち、菩薩摩訶薩が、独り寂所におもむき、聞と思と修とによってつくられる智慧によって、涅槃の城へ趣入する道を歩み、自己の覚恵によって習気の所依を転ずることをさきとし、自内証の行境と他のそれぞれの地 (bhūmi) の住所の特殊の意義の相にすすむとき、〔かれは〕「意味」に明らかなるものである。

さらにまた、マハーマティよ、語の意味に明らかな菩薩摩訶薩は、語は意味より、また、意味は語より、異(不二)

なり、不異なりと觀察する。もしも、マハーマティよ、意味が語より異であるならば、語は意味を顯わす因ではありえないであろう。灯によって財物が〔照明される如く〕、かの意味は語によって了解されるからである。たとえば、マハーマティよ、或る人が灯をとって、これは我れの財物であり、かくの如くにかの場所にあると、財を見る如く、かくの如く、マハーマティよ、言語の分別である語の灯によって、もろもろの菩薩摩訶薩は、言語の分別をはなれて、聖なる自内証に入る。

さらにまた、マハーマティよ、不滅と不生と本性涅槃と三乗と一乗と五〔法〕と〔唯〕心と〔三〕性などにおいて、語の如くに執着するときは、〔それらが〕別様に建立せられ、分別されるから、種々の幻を見る分別の如く、増益と損滅の見におちいるものとなる。たとえば、マハーマティよ、種々の幻が別様に見られるとき、愚人によっては別様に分別されるけれど、聖者にはしからざる如し。ここに、次のように説く。

34 語の如くに「意味」を分別して、法性(dharmata)を増益する。かれらは、実に、かれ(法性)を増益するから、地獄の住処におちいる。

35 諸蘊の中に実に、我(ātman)はあることなく、また、実に、我の中に諸蘊も「なし」。それらは分別される如くに存在しない。また、それらは実に、存在しないのでもない。

36 一切法の有(asritva)が、愚人によって分別されるとき、もしも、それらが見られるが如くに存在するならば、すべての人々は、真実の見解をもつものであろう。

37 一切法は無(abhaya)であるから雑染と清浄はなし。それら(一切法)は、見られる如くに存在しない。また、それらは、実に、存在しないのでもない。

(10) 智と識とについて

さらにまた、マハーマティよ、わたくしは汝に、智 (jñāna) と識 (vijñāna) の相を説くであらう。この智と識との種々の差別の相によって、汝と余の菩薩摩訶薩は、智と識の相に通達し、すみやかに無上なる正等覺をさとりてあらう。

まづ、マハーマティよ、智には三相がある。すなわち、世間〔智〕と出世間〔智〕と出世間上上〔智〕とである。<sup>p.157</sup>また、生じおわって滅するものが識であり、生ぜず滅しないものが智である。また、マハーマティよ、有相と無相におちいり、無と有におちいり、種々の相を因とするものが識であり、有相と無相より超越した相が智である。また、マハーマティよ、〔善惡の業の〕積集 (upacaya) の相が識であり、離散 (apacaya) の相が智である。また智には三種がある。自と共の相を觀察するものと、生と滅とを觀察するものと、不生と不滅を觀察するものである。

さて、世間智は、有と無との主張に執着する一切の外道と愚夫異生にぞくするものである。次に、出世間智は、自と共の相におちいった心に執着する一切の声聞と獨覺にぞくするものである。次に、出世間上々智は、もろもろの仏と菩薩とが、無相の法を究明し、不滅と不生を知見し、有と無の主張をはなれた如来地の無我を了解することから生ずる。

さらにまた、マハーマティよ、無執着の相は智であり、種々の境にたいする執着の相が識である。また、マハーマティよ、〔無明と愛と取との〕三和合の作用の生起と相応する相が識であり、相応しない自性の相が智である。また、マハーマティよ、智は無得 (apriyā) の相であり、<sup>p.158</sup>聖なる自内証智の行境であり、不入不出であるから、水中の月の

如し。ここに、次のように説く。

- (38) 業は心によって集められ、智によって離散する。慧 (prajñā) によって無相 (nirābhāsa) と威力とを獲得する。
- (39) 心は境に束縛され、識は究理において生起する。殊勝なる無相において、実に、慧が生起する。
- (40) 心と意と識とは、「実は」、憶想と分別とをはなれている。分別の法性を得た声聞は勝者の子ではない。
- (41) 寂滅と殊勝なる忍辱における如来したる智は、実に、清浄であり、殊勝なる義を生じ、起動 (samudācāra) をはなれている。
- (42) わたくしには三種の慧がある。それによつては聖者は照明せられ、それによつて相は分別せられ、また、それは諸法を覆う。
- (43) 慧は、実に、二乗とはなれ、顕現とはなれている。もうものの声聞の「慧」は、実有の執着をもつて生起する。如来したる慧は、唯心に悟入するから無垢である。

# (11) 外道の転変論について

さらにまた、マハーマティよ、転変論者 (pariṇāma-vādin) としてのもうものの外道の転変についての見解は九種である。すなわち、形態の転変 (saṃśhāna-pariṇāma) と形相<sup>p.159</sup>の転変 (lakṣaṇa-p.) と因の転変 (hetu-p.) と結合の転変 (yukti-p.) と「ブルシヤの」観照の転変 (dṛiṣṭi-p.) と生の転変 (utpāda-p.) と有の転変 (bhāva-p.) と縁より顕現する転変 (pratyaṃya-abhivyakti-p.) と所作より顕現する転変 (kriyā-abhivyakti-p.) とである。これが「マハーマティよ、九種の転変の見解であり、これらによつて一切の外道は我 (ātman) が有・無として生ずるといふ転変

論者となる。

この中、マハーマティよ、「形態の転変」とは、すなわち、黄金の莊嚴具に種々の変化がみられる如く、形態の變化が見られるからである。たとえば、マハーマティよ、黄金の腕環と首飾りと頂宝などの転変によって転変された、種々の形態に転変したものが見られるけれど、黄金が自体として転変しないように、かくの如く、実に、マハーマティよ、一切の存在の転変が若干の外道によって分別される。

また、余他のものたちによって因から「転変が分別される」。さらにまた、かれら（余他のもの）は、同様でもなく別様でもなく「転変を」分別する。かくの如き、「余他の」一切の転変の差別は、略が牛乳「より生じ」、酒が果実の熟することより「生ずる」如くに見られるべきである。かくの如くに、マハーマティよ、酪が牛乳より、酒が果実より「転変する」など、それぞれの転変がもうもの外道によって分別される。

しかし、自心所現の外界の存在は無であるから、有・無としての何らかのものが転変するのではない。かくして、実に、マハーマティよ、もうもの愚夫異生は自らの分別についての修習を起すことを知見すべきである。マハーマティよ、幻と夢において生起した色を見る如く、そこに、何らの法も生ぜず、また、滅しない。たとえば、マハーマティよ、石女の子の死と生との如く、夢中に生と滅とが知覚される如し。ここに、次のように説く。

(44) 時と形態との転変は、大種 (Dhūta) と有 (bhāva) と根 (indriya) とにおける「転変」である。中有に攝在するものを分別する人々は明智のものでない。

(45) 世間を縁生のものでして、実に、もうもの勝者は分別せず。しかし、実に、この世間は縁「生」にして、ガンドルバ城の如し。

(12) 束縛と解脱について

そのとき、実にマハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた世尊に、一切法の束縛(sandhi)の意味と、解脱(parimocana)の意味とを請うた。

世尊は一切法の束縛と非束縛との相をわたくしに説きたもうべし。如来応供正等覺者はわたくしに説きたもうべし。束縛と非束縛との相がよき弁別をもって明らかにされるとき、わたくしと余のもろもろの菩薩摩訶薩は、一切の束縛と非束縛とに方便善巧なるものとなり、語の如くに意味に執着する束縛におちいらず、また、一切法の束縛と非束縛とに善巧なることにより、言と文字との分別を智慧によってほろぼして、一切の仏国土の衆会に行くものとなり、力と自在と神通と陀羅尼との印によって印せられ、種々の変化の光明をもって十無尽句とよく相応した智慧をもち、月と日と摩尼と大種との無功用なるはたらきの状態に等しく、一切法において自らの分別の相をはなれた見解を持ち、夢と幻等の一切法を見ることによって、仏地の住処にはいり、すべての衆生の世界を、所応の如くに法を説くことによって引導し、夢と幻等の一切の法が有無の主張をはなれ、滅と生の分別をはなれているときに、語(ruta)と意味(artha)とを交互に生ずる所依たるものとして、住することができでありましょう。

世尊はのたもうた。「よきかな、よきかな、マハーマティよ、されば、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであらう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は彼れに次のようにのたもうた。

マハーマティよ、一切法について語の如くに意味に執着する束縛は無量である。「すなわち、」相に執着する束縛、縁に執着する束縛、有と無とに執着する束縛、生と不生とを分別し執着する束縛、滅と不滅とを執着し分別する束縛、乗と非乗に執着し分別する束縛、有為と無為とを分別し執着する束縛、地と地の自相を分別し執着する束縛、自己の分別の現証を分別する束縛、外道の所依である有と無の主張を分別する束縛、三乗と一乗の現証を分別する束縛〔など〕である。マハーマティよ、これら（束縛）と、その他〔の束縛〕が、もろもろの愚夫異生の自己の分別の束縛である。 <sup>p.128</sup> もろもろの愚夫異生は束縛を結んで、各別に分別しつつ、有と無の束縛の相の執着に執着し、自己の分別の見解の束縛の悦楽のために、絹の蚕の如くに、自己の分別の見解の束縛によって、自と他とを纏う。

しかし、このばあい、マハーマティよ、一切法に寂滅が見られるから、なんらの束縛もなく、束縛の相もなし。マハーマティよ、菩薩摩訶薩は、分別をおこさないことによって、一切法において、寂滅の見解あるものとして住する。さらに、マハーマティよ、外界の存在の無なる自心所現の相を了解し、無相なる唯自心にしたがい、一切の有・無の分別の束縛の寂滅を知見するときは、一切法には束縛もなく束縛の相もない。このばあいには、マハーマティよ、なんらのものも束縛されず、解かれない。ただ、非真実におちいった知覚によって束縛(banda)と解脱(moksa)とが知られる。何故かといえば、すなわち、一切法の有・無の束縛は不可得であるからである。

さらにまた、マハーマティよ、もろもろの愚夫異生の束縛は三種である。すなわち、「それは」貪欲と瞋恚と愚痴とである。また、それに結びついてもろもろの趣の束縛が生ずるところの、後有を引く喜貪と俱なる愛も、そうである。このばあい、もろもろの有情の五趣の束縛が束縛である。マハーマティよ、束縛が断ずるときは、束縛と束縛の相は知られない。

p. 103  
さらにまた、マハーマティよ、三和合の縁の作用の結合に執着するために、もろもろの識の束縛があり、間断なく生起するにしたがつて執着するために、有 (bhava) の束縛がある。三和合の縁からもろもろの識がはなれ、三解脱を知見するときに、一切の束縛は生起しない。ここに次のように説く。

(46) 虚妄分別は、実に、束縛の相といわれる。その如実遍知から束縛の綱は明浄になる。

(47) 存在を知る言語に執着することによって、束縛を知らないもろもろの愚人は、絹の蚕の如くに、自己の分別によって縛せられる。

(13) 「法の自性は分別される如くに存在しない」という教説の意味。「一切法は不生である」と説くべきでないこと。

さらにまた、マハーマティはいった。

「それぞれの分別 (vikalpa) によってそれぞれの諸法が分別されるとき、実に、それは遍計所執されたもの (parikalpita) であり、それらには自性がない。」ということが、世尊によって説かれておりますが、もしも、世尊よ、それが遍計所執されたものであり、法の自性 (bhava-svabhāva) の相として認められないものならば、世尊よ、汝がこのように説きたもうとき、一切法が遍計所執性 (parikalpita-svabhāva) になるために、雑染 (saṃkleśa) と清浄 (vyavadāna) とが無いという過失におちいりはしませんか。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、汝がいう如く、これは、たしかにそうである。マハーマティよ、法の自性は、もろもろの愚夫異生によって分別されるが如く、その如くに存在しない。p. 104  
マハーマティよ、それは遍計所執されたものであり、法の自



性の相として認められるものではない。しかし、マハーマティよ、もろもろの聖者によって法の自性が聖なる認識と聖なる見解と聖なる智恵の眼によって認められる如くには、法の自性は存在する。

マハーマティはいった。

世尊よ、もしも法の自性が、もろもろの聖者によって、天〔眼〕や肉眼によってでなく、聖なる認識と聖なる見解と聖なる知恵の眼によって了解される如くに存在し、もろもろの愚夫異生によって分別される如くに存在しないとすれば、世尊よ、もろもろの愚夫異生には、聖なる法の自体が了解されないから、どうして、分別の滅がありましか。しかし、世尊よ、かれら（愚夫異生）は顛倒したものでもなく、不顛倒なものでもありません。なぜかという、「かれらは、」聖なる法の自性を了解し、有・無の相の滅を智見するからです。また、世尊よ、「二面、」もろもろの聖者にとっても、事物（法の自性の相）は、自相の境を行境とするものでないから、分別される如くに存在しない。世尊よ、かれら（聖者）にとっても、かの法の自性の相は、根拠（*hetu* 因）となづけられないものであるから、遍計所執性と名づけられる。「それは、」法の相の見解におちいったものであるから、他なる（愚夫異生）の行境である。「故に、」世尊よ、「愚夫異生は」法の自性の相を了解しないから、「法の自性が」かれら（愚夫異生）にとって存在する如くないということは、無窮（*anavasthā*）<sup>p.165</sup>の過失におちいります。世尊よ、遍計所執性を根拠とするものは、法の自性の相のものでありませんが、分別によって分別されているものは、なぜ、分別されるが如くその如くに存在しないのですか。世尊よ、分別の相と自性の相とは異なっているからです。世尊よ、分別と自性の相との二つの不相似な根拠をもっているものが、もろもろの愚夫異生によって互に考えられるとき、それら二つは同一ではありません。しかし、もろもろの衆生の分別を滅するために、分別によって分別される如くに存在しない、ということが、いわれ

るのであります。

〔さらに、マハーマティはいった。〕

世尊よ、あなたは、もろもろの衆生の有・無の見解をしりぞけるにもかかわらず、何故に、〔聖なる〕事物の自性に執着し、聖智の行境に執着して、有見を建立し、聖智の自性を説いて、寂靜の法 (vivikta-dharma) の教説をなしたまわないのですか。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、わたくしは聖なる事物の自性を説くことによって、寂靜の法の教説をなさずに、有見を建立するのではない。マハーマティよ、無始時來、法の自性の相に執着する諸衆生の恐怖の状態を捨てしめるために、事物の自性の執着の相をした聖なる智見をもって、わたくしは寂靜の法の教説をなすのである。マハーマティよ、わたくしは、〔たんに〕法の自性の教説をなさず。しかし、マハーマティよ、〔わたくしの教説によって諸衆生は、〕みづから如実に了解した寂靜の法に住するものとなり、迷亂が無相であることを知見して、唯自心所現にはいり、外界pariṣの所現の有・無をしりぞけた見解をもち、三解脱をもって如実に了解した印によって印せられ、有・無の事物の見解をはなれ、自覚証智によって、もろもろの法の自性に現前に住するものとなる。

さらにまた、マハーマティよ、菩薩摩訶薩は「一切法は不生である。」という立宗 (pratijñā 主張) をなすべきでない。これは、何故かといえ、立宗が一切法の中に包含され、また〔立宗が〕その因〔である一切法〕から生起する相のものたるによって、「一切法は不生である。」という立宗を語るとき、マハーマティよ、菩薩摩訶薩は立宗にきづつけられるからである。すなわち、「一切法は不生である」という立宗は、その立宗がかれ（一切法）によって

生ずるものであるから、きづけられるのである。また、もし、かの立宗も、一切法の中に包含されるから不生であるときは、立宗も同一相のものとして不生であるから、「一切法は不生である」という、その論義（立宗）はきづけられる。支分（avayava）による立宗は有・無として不生である。なぜなら、マハーマティよ、かの立宗は一切法の中に包含されるから、有・無として不生なる相であるからである。もしも、マハーマティよ、このように、立宗が不生であるにかかわらず、「一切法は不生である」という立宗をするならば、かくの如きときにも、立宗の破綻におちいる。立宗が有・無として不生なる自性の相であるから、立宗はなされるべきでない。実に、マハーマティよ、それら「諸支分」の立宗は、不生なる自性の相のものである。故に、マハーマティよ、汝にとって、立宗は多くの過失にきづけられるから、なされるべきでない。諸支分は相互に因となる相の異なるものであり、所作のものであるから、諸支分の立宗はなされるべきでない。また、一切法不生と同様に、一切法空・無自性なりと、マハーマティよ、菩薩摩訶薩は立宗すべきでない。

しかし、マハーマティよ、菩薩摩訶薩は、幻と夢の如しと一切法を説くべきである。一切法が顕現（atirīya）の相であるから、また見解と知識とを痴闇ならしめるから、不生とは説かず、もうもろの愚人の恐怖の状態をはなれしめるために、「一切法が」幻と夢の如き存在であると説くべきである。実に、マハーマティよ、無と有の見解に墮したもうもろの愚夫異生をして、かれらの恐怖あらしめず、また、マハーマティよ、恐怖しつづる「愚夫異生をして」大乘より退かしめるべきでない。ここに、次のように説く。

(48) 自性（svabhāva）なく、識（vijñapti）なく、実物（vastu）なく、住所（ālaya）なし。実に、これらは、悪覺をもてる、死屍の如き、もうもろの愚人によって分別されたものである。

(49) 「<sup>a</sup>一切法は不生である」とは、一切の外道の意見にたいするものである。実に、縁をもっている諸法が、いつこかに生じているのではない。

(50) 「一切法は不生である」と立宗をもって分別すべきでない。かれ（立宗）が因をもつものであるから、それら（一切法）にかんする、かの成立の知はきづつけられる。

(51) たとえば、毛輪 (*keṣaṇḍuka*) が眼翳ある人々によって非真実に執着される如く、かくの如く、法の分別 (*bhava-vikalpa*) が非真実にもろもろの愚人によって分別される。

(52) 三有は仮名のみ (*prajñapti-nātra*) であり、実物の自性 (*vastu-svabhāva*) として存在しない。もろもろの究理論者は、仮名を実物の自性として分別するであらう。

(53) 相 (*nimitta*) と実物としての顯現 (*vastu-vijñapti*) と意の動転がある。しかし、わたくしの子たちは、それらを超越して、かれらは無分別を行ずる。

(54) 陽炎に水がないのに、水の執着がある如く、もろもろの愚人に見られるものは、実にかくの如し。しかし、聖者に「見られるものは」異なっている。

(55) 無相 (*nirābhāsa*) を行ずるもろもろの聖者の見解は清浄であって、三解脱より生じ、生と滅とをはなれている。実に、もろもろの存在は無相であり、もろもろのヨーギンにとっては無も存在しない。もろもろの聖者の果は、

有・無の平等性をもって生ずる。

(57) <sup>a</sup>いかにして、実に、もろもろの存在に無があるのか。いかにして、「有・無が」平等性になるのか。心が外と内との動揺を認知しないとき、そのとき、「動揺が」滅する。平等なる心を見るから。

(14) 唯識が、所知にたいする無知 (ajñāna) でなく、知 (jñāna) である。

さらにまた、マハーマティはいった。

「知 (jñāna) が所縁の境を把握しないとき、そのときに、唯識に住すること (vyavasthāna) がある。〔すなわち〕、識の所取 (viñāpter-grāhya) が無なるによって、能取には、また、〔所取を所縁の境として〕能取するはたらしがない。かれ (所取) を能取することがないから、分別 (vikalpa) と称せられる知がおこらない。」ということが、世尊によって説かれておりますが——世尊よ、もろもろの存在の自と共の種々相それ自体を認知しないから、知が〔所知の境を〕把握しないのですか。もしくは、自と共の種々相の存在の自性の力に圧倒されるから、知が〔所知の境を〕把握しないのですか。もしくは、壁・幕・土手・壘壁・地・水・風・火の障害や、遠と近のために、知が〔所知の境を〕把握しないのですか。もしくは、未熟や盲目や老衰の感覚器官をもつために、知が所知の境を把握しないのですか。

もしも、世尊よ、自と共の種々相それ自体を認知しないから、知が〔所知の境を〕把握しないとすれば、そのときは、世尊よ、知ということができません。現に存在する境を把握しないのは、世尊よ、それは無知 (ajñāna) である。もしも、自と共の種々相の存在の自性の力に圧倒されるから、知が〔所知の境を〕把握しないとすれば、それも、<sup>P. 15</sup> 実に、世尊よ、無知であり、知ではない。世尊よ、所知があるとき、知が生起する。しかし、〔所知が〕無ければ〔知は〕おこらない。それ (所知) を具するから、所知の知といわれる。また、壁・幕・土手・壘壁・地・水・風・火の障害や、遠と近のために、知が〔所知の境を〕把握せず、あるいは、未熟や老衰や盲目になって感覚器官が不完全

なために、知が「所知の境を」把握しないとすれば、知覚の不完全のために、現に存在する對境をかくの如くに把握しないのは、それも、世尊よ、知ではなく、実に、無知である。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、実に、それ（知）が所知の境を把握しないのは、かくの如き無知ではなく、知である。マハーマティよ、これを意趣して (sandhaya)、わたくしは「知が所縁の境を把握しないとき、そのとき、唯識に住することがある。」といったのである。唯自心所現を了解し、有・無として外界の存在が存在しないとき、知はもはや境を把握しない。「知が」それ（境）を把握しないから、能知と所知との二つは生起せず、三解脱を証悟するから、知は不可得である。しかし、もうものの究理論者は、無始時來、有無の戲論の習気によって熏習された思想をもち、かくの如くに知らず。かれらは、「かくの如くに」知らないから、外界の実体と形体と形相の存在を無と考え、分別の不生起 (apavṛtti) を唯心の状態 (citta-mātrata 唯心性) であると説くであろう。「かれらは」我・我所の相を把握する執着に執着し、唯自心所現を了解しないから、能知と所知とをそれぞれ分別する。また、かれらは、能知と所知とをそれぞれ分別するために、外界の有・無の究明を知らないから、断見に住する。ここに次のように説く。

(59) もしも、知が現に存在する所縁を見ないなら、それは、実に知ではなく、無知である「という」、これが、もうものの究理論者の理趣である。

(59) それ自体の相が「認知され」ないために、また、障害と遠と近とのために、もしも、知が「所知を」見ないなら、それは、邪知 (mithyā-jñāna) といわれる。

(60) また、かの所知が現に存在しているにかかわらず、未熟と老衰と盲目のために、もしも、知が生じないならば、

それは、邪知といわれる。

(15) 究極の理趣と教説の理趣

〔世尊はのたもうた。〕

さらにまた、マハーマティよ、もろもろの愚夫異生は、無始時來の戲論の積集の垢重き (dausihulya) 自己の分別を舞劇において舞いながら、究極的なそれ自身の理趣 (svasiddhanta-naya) と言教の理趣 (decanā-naya) とに巧みでなく、自心所現の外界の存在の相に執着し、方便の言教の誦誦に執着して、清浄なる四句の道理である究極的なそれ自身の理趣を反省しない。

マハーマティはいった。

世尊よ、汝が語りたもうが如く、たしかにそうであります。世尊は、言教と究極の理趣の相を私に示してください。それによって、わたくしと余のもろもろの菩薩摩訶薩は、未來の時に言教と究極の理趣とを巧みに知るものとなり、外道と声聞と独覺の乘にぞくする邪惡なる究理の人々によって惑わされないでありますよう。

世尊<sup>ニ</sup>はのたもうた。「実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであらう。」と。「よぎかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聽從した。

世尊は、かれに、次のようにのたもうた。

マハーマティよ、過去と未來と現在のもろもろの如來應供正等覺者の法の理趣 (dharma-naya) は二種である。すなわち、教説の理趣 (decanā-naya) と究極の独自の理趣 (siddhanta-pratyavasthāna-naya) とである。この中、教説

の読誦の理趣は、マハーマティよ、すなわち、種々の資糧（悟りへの準備）についての經典の教示であり、もろもろの衆生のために、「かれらの」心と信解とにしたがって、説くところのものである。この中、また、マハーマティよ、究極の理趣は、なにかといえ、それによって、もろもろのヨーギンが自心所現のものについての分別をはなれるようになるところのものである。すなわち、一と異と俱と非俱の主張におちいらず、心と意と意識とを超え、自内証の境であり、理由や証明や見解の相からはなれ、無と有の二辺におちいった外道と声聞と独覺の乘にぞくする一切の邪惡の究理論者によって味われないもの、それを、わたくしは究極〔の理趣〕であると語る。これが、マハーマティよ、究極の理趣と教説〔の理趣〕の相である。ここに汝と余の菩薩摩訶薩は学ぶべきである。ここに、次のように説く。

(61) わたくしに二種の理趣がある。実に、「これは」、究極と教説とである。わたくしは、もろもろの愚人にかれ（教説）を説き、もろもろのヨーギンに究極を説く。

(16) ローカヤタについて

<sup>p. 173</sup> そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に次のようにいった。

世尊よ、或る時、或る機会に、如来応供正等覺者は、「種々の密呪（mantra）と弁才（pratiḥana）とをもっているローカヤタの徒（lokayāta）は、恭事すべきでなく、尊敬すべきでなく、供養すべきでない。それに恭事するときは、世間の財（āmiśa）の獲得があるが、法（dharma）の獲得がない。」と説きたもうた。また、何故に世尊によっても、「ローカヤタの徒は種々の密呪と弁才をもてるものであり、それに恭事するときは、世間の財の獲得があ



るが、法の獲得がない。」と説かれたのですか。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、ローカーヤタの徒は、種々の密呪と弁才とをもっており、種々の因 (heṃ) と言葉 (pada) と文字 (vyañjana) とによつて諸愚人を誑惑し、道理を具せず、義を具せず、あるいは、愚人の談論を説く。故に、マハーマティよ、ローカーヤタの徒は「種々の密呪と弁才とをもてるもの」といわれる。種々の巧妙な言葉によつて諸愚人を引き、真実の道理にはいることによつて事を始めない。自ら一切法を了解せず、二辺におちいつた見解をもつて諸愚人を誑惑し、また、「[五] 趣の相続より解放されないから自らを傷ける。唯自心所理を了解せず、外界の存在の自性に執着するから、[かれらには] 分別の滅がない。故に、マハーマティよ、種々の密呪と弁才とをもっているローカーヤタの徒は、生と老と病と死と憂と悲と苦と悩と悶などから解放されず、種々の言葉と文字とによつて、あるいは、因と喩とをもちだすことによつて、諸愚人を誑惑する。

また、マハーマティよ、多くの論書に精通した知識をもち、自らの文法論書 (śabda-śāstra) の作者であるインドラは、竜の相貌をとつたかの「ローカーヤタの徒の」弟子によつて、天上のインドラの宮殿において、「汝の千輻の輪が破られるべきか、それとも、我れの一々の竜の身の鎌首の切断があるべし。」と論議をもうけられ、法を具し竜の相貌をとつたローカーヤタの徒の弟子は、諸天の「王である」インドラを征服し、「かれの」千輻の輪を破つて、こくなる世間に來つた。かくの如く、マハーマティよ、ローカーヤタの徒は、種々の因と喩の構成をかの両棲の動物にも学び、天と阿修羅との世界を種々の言葉と文字とによつて誑惑し、「それらを」生と滅の見解の執着をもつて執着せしめる。いわんや、諸人はもとよりである。故に、マハーマティよ、ローカーヤタの徒は、苦なる生の因をもたら

すから、遠ざけるべきであり、恭事すべきでなく、尊敬すべきでなく、供養すべきでない。

マハーマティよ、実に、もろもろのローカーヤタの徒は、身体と知覚と対象の把握のみを種々の言葉と文字によって説いている。しかし、マハーマティよ、ローカーヤタ (lokāyata ローカーヤタ思想) は百千となり、後世<sup>after</sup>、後の五百年に結合が破られるであろう。誤った議論や因の見解を示すからである。弟子ならざるものを含むから、結合が破られるであろう。マハーマティよ、かの結合の破られた、種々の因 (hetu) を構成するローカーヤタが、自己の作因 (sva-karāṇa) の執着に執着するもろもろの外道によって説かれる。「しかし、それには」独自の道理 (sva-naya) がない。マハーマティよ、なんらの外道にも、独自の論議の道理はない。ローカーヤタが百千の多くの相の因によって説かれるけれど、「それには」独自の道理がない。しかも、「かれらは」、愚痴のために、これがローカーヤタである<sup>と</sup>知らない。

マハーマティはいった。

世尊よ、一切の外道が、自己の作因の執着に執着し、種々の句と文字や、喩の構成によってローカーヤタを説き、独自の道理 (svanaya) をもっていないにせよ、世尊もまた、種々の場所より集った天と阿修羅と人の集会にたいし、種々の句と文字によってローカーヤタ (世間的思想、ローカーヤタ思想) を説き、独自の道理をもっておられない。「なぜなら、世尊の教説も」、一切の外道の教説に含まれるからです。

世尊はのたもつた。

マハーマティよ、わたくしはローカーヤタを説かない。得 (dṛya) と失 (vyaya) とを説かない。マハーマティよ、わたくしは得失のないことを説く。この中、「得」といわれるものは、マハーマティよ、生産 (utpāda) の集積であ

り、集合し来ることから生ずる。この中、「失」といわれるものは、マハーマティよ、壊滅である。「得失のないこと」とは、これは、生産がないこと〔と壊滅がないこと〕の名称である。マハーマティよ、わたくしは一切の外道の分別に含まれることを説かない。何故かといえば、外界の有と無に執着せず、唯自心所現に住し、二相（所取・能取）の生起の分別がおこらず、原因（nimitta）となる対象がなく、唯自心所現を了解することによって、自心所現のものにたいする分別がおこらないからである。分別がおこらなければ、無相と空と無願の三解脱にはいるから、解脱せるもの（mukta）といわれる。

マハーマティよ、わたくしがいずこかの土地に住していたときだと記憶しているが、そのとき、わたくしの住しているところへローカーヤタのバラモンが来て、聴許をまたず、わたくしに次のようにいった。「ああ、ゴータマよ、一切は所作である。」と。マハーマティよ、かれにたいして、わたくしは次のようにいった。「ああ、バラモンよ、もしも一切が所作であるならば、これは第一のローカーヤタである。」と。〔さらに、バラモンはいった〕。「ああ、ゴータマよ、一切は非所作である。」と。〔しかし、かれにたいして、わたくしはいった〕。「もしも、バラモンよ、一切が非所作であるならば、これは第二のローカーヤタである。」と。〔また、バラモンは次のようにいった〕。「一切は無常である、一切は常である、一切は所生のもの（utpada）である、一切は所生のものではない。」と。〔しかし、かれにたいして、わたくしはいった〕。「これは、バラモンよ、〔第三乃至〕第六のローカーヤタである。」と。マハーマティよ、さらにまた、ローカーヤタのバラモンは、わたくしに次のようにいった。「ああ、ゴータマよ、種々の理由根拠（hetu-upapatti）が見られるから、一切は同一である、一切は別異である、一切は俱である、一切は非俱である、一切は因に依存するものである。」と。〔しかし、かれにたいして、わたくしはいった〕。「バラモンよ、これは、また、

〔第七乃至〕第十一のローカーヤタである。』と。さらにまた、『バラモンはいった』。『ああ、ゴータマよ、一切は無記である、一切は有記である、アートマンは存在する、アートマンは存在しない、此世は存在する、此世は存在しない、他世は存在する、他世は存在しない、他世は存在でもあり非存在でもある、解脱は存在する、解脱は存在しない、一切は刹那である、一切は刹那でない、虚空と非択滅と涅槃とは、ああ、ゴータマよ、所作である、非所作である、中有は存在する、中有は存在しない。』と。マハーマティよ、わたくしはかれにたいして次のようにいった。『ああ、バラモンよ、かくの如きは、これらはすべて、ローカーヤタである。』と。

『バラモンよ、これらのローカーヤタは、汝の所屬であり、わたくしの所屬ではない。ああ、バラモンよ、無始時來の戲論と分別の垢重き習氣を原因とするものが三有であると、わたくしは語る。バラモンよ、唯自心所現を了解しないから分別が生ずるのであって、外界の存在を把握するから〔分別が生ずるの〕ではない。もうものの外道にとっては、アートマンと感覺器官と対象との三つのものの結合から〔分別が生ずるのであるが〕、わたくしにとっては、かくの如くではない。ああ、バラモンよ、わたくしは因論者(hetuvādin)でもなければ、無因論者(ahetuvādin)でもない。けれども、わたくしは、実に、分別を所取と能取の形態として施設し、縁起を説くのである。汝の(こ)ときも、のによって、あるいは、他のアートマンの執着におちいった人によって、〔これは〕知られない。マハーマティよ、涅槃と虚空と滅との〔非所作のもの〕の眞實は、数において認知せられない。いわんや、〔その他の〕所作性のものは、もとよりである。』

さらに、また、マハーマティよ、ローカーヤタのバラモンは〔わたくしに〕次のようにいった。『ああ、ゴータマよ、この三有は無明と愛と業とを生因とするのか、あるいは、生因としないのか。』と。〔これにたいして、わたくし

は次のようにいつ。「バラモンよ、これら二つは、いずれもローカーヤタである。」と。「さらに、バラモンはいった」。「ああ、ゴータマよ、一切の存在は自と共の相におちいつている。」と。「わたくしはいった」。<sup>P.178</sup>「バラモンよ、これらもまた、同じくローカーヤタである。バラモンよ、意 (manas) によって激動せられ、外界の対象に執着し分別するかぎり、そのかぎり、ローカーヤタである。」と。

さらに、また、マハーマティよ、ローカーヤタのバラモンは、わたくしに次のようにいつた。「ああ、ゴータマよ、自分の定立 (prasiddha) は、一切の外道の種々の言葉と文字や、因と喩とを構成することによって説かれる。しかし、ああ、ゴータマよ、「かくの如き」ローカーヤタとちがった何らかのものが存在するか。」と。「わたくしはいった」。「ああ、バラモンよ、汝の定立するところのものでなく、しかし、定立されないのではなく、種々の言葉と文字とによって説かれないのではなく、意義を有しないのではないところのものが存在する。」と。「バラモンはいった」。「自分の」定立が説かれないところの「非ローカーヤタ」 (alokayata) とは何であるか。」と。「わたくしはいった」。「ああ、バラモンよ、外界の存在の虚妄なる分別の戲論に執着する一切の外道や汝の知識がうかがいえない非ローカーヤタが存在する。すなわち、それは、有・無の分別の不生起なるもの、「いいかえれば」、唯自心所現を了解することによって分別が生起せず、外界の対象を把握しないことによって、分別が自らの「本来の」状態 (svasthana) に住するところのものである。故に、この非ローカーヤタは、わたくしに属するものであり、汝に属するものではない。「自らの」本来の「状態に住する」というのは、「生起しない」という意味である。分別の不生 (anupatti) が不生起 (aprayiti) といわれる。かくして、ああ、バラモンよ、ローカーヤタでないものとは、それは、簡単にいえば、識の活動のないところのものである。<sup>P.179</sup> 趣と死と生と欲求と執着と恋着と執見に住することと、憶想と種々相の執着と、和合

(無明と愛と業)と、渴愛の縛と、因の執着とは、これらは、ああ、バラモンよ、汝にぞくするローカーヤタであり、わたくしにぞくするものではない。かくの如く、マハーマティよ、わたくしはローカーヤタのバラモンに近づかれて問尋され、しかも、かれは、わたくしに、以上の如く回答され、沈黙して去った。

そのとき、竜王のクリシュナパクシカ(Kṛiṣṇapaksika)がバラモンの姿をして来って、世尊に次のようにいった。

「ときに、実に、ゴータマよ、他世は存在しない。」と。「世尊はのたもうた。」ときに、実に、男子よ、汝は何処より来たのか。」と。「バラモンはいった。」「ゴータマよ、自分は白色の鳥(gveta-dvīpa)から、ここに来た。」と。「世尊はのたもうた。」「バラモンよ、それこそが他世である。」と。そのとき、男子は、弁舌なく、屈伏せられ、かくれ去り、わたくしに質問せずに、「釈迦の子は、自分の道理より外なるものであり、煩惱の生起がなく、相がなく、因がない論者であって、自らの分別所現の相を了解するから、分別の不生起を語るのである。」という、自己の道理と異なった言葉を思ふた。しかし、いま、マハーマティよ、汝は、何故に、「種々の密呪と弁才とをもったローカーヤタの徒に恭事するときは、財の獲得があるが、法の獲得がない。」と、わたくしに質問するのか。

マハーマティはいった。「それでは、世尊よ、法と財という言葉の意味は如何。」と。

世尊はのたもうた。「マハーマティよ、未来の群生を見て、二つの言葉の意味にたいする考察を起すとは、よきかな、よきかな。それでは、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであらう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

世尊はかれに次のようにのたもうた。

この中、財とは、マハーマティよ、何かといえは、すなわち、財とは触れられるものであり、引かれるものであり、

妄取されるものであり、味われるものであり、外境に執着せしめ、悪見をもって二辺にいれしめ、未来の蘊を生じ、生・老・病・死・憂・悲・苦・悩、悶を生じ、後有を引く愛より生ずる、等のものであり、これが、わたくしと余の諸仏世尊によって財といわれる。マハーマティよ、ローカーヤタの徒に恭事するものは、ローカーヤタを得、財を得し、法を獲得しない。

この中、マハーマティよ、法の獲得は何かといえ、すなわち、自己の心 (svacitta) と法 (dharma) との「[一] 無我を了解し、法と人との無我の相を見るから、分別がおこらず、地をさらに高く高く遍知していくから、心と意識よりはなれ、一切の仏智の灌頂を得、十無尽句を得、一切法に無功用であることによって、力自在であるのが、法〔の獲得〕」といわれる。マハーマティよ、外道の論は、あらゆる見解の戲論に分別し、存在の「有無の」二辺におちいるから、実に、しばしば、もろもろの愚人を断と常との二辺におちいらしめるが、もろもろの賢者の「〔論〕」は、そうではない。「もろもろの外道は」、無因論をとるから常見となり、因が破壊し、因が無であるために断見となる。しかし、生と住と滅とを見ないことによって、法〔の獲得〕があると、かくの如くに、わたくしは語る。以上が、マハーマティよ、法と財についての決定であり、ここに、汝と余の菩薩摩訶薩は学ぶべきである。ここに、次のように説く。

(62) 摂取 (saṃgraha) によって衆生を調伏し、戒によって自在力あるものとなる。智慧によって見を滅し、もろもろの解脱によって「智慧を」増上せしめる。

(63) これら一切はローカーヤタであり、もろもろの外道によって説かれるところは妄語である。結果 (kārya) と原因 (kāraṇa) が有るという見解のために、独自の定説がない。

(64) わたくしは結果と原因をはなれ、ローカーヤタをはなれた、独自の定説を弟子の衆に示す。

(65) 唯心にして、見られるもの (*dīṣya* 所現) は存在しない。心が常と断とをはなれ、所取と能取の存在として、二種に顕現する。

(66) <sup>p. 1182</sup> 心が生起するかぎり、そのかぎり、ローカーヤタである。世間を自心と見るとき、分別が生起しない。

(67) 得 (*aya*) は事の目的 (*kāryārtha*) が現われることであり、失 (*vyaya*) は事「の目的」が消滅することである。得と失とを遍知するとき、分別が生起しない。

(68) 常と無常、所作物と非所作物、他と非他、かくの如き一切はローカーヤタの道理である。

# (17) 涅槃について

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に次のようにいった。「世尊よ、一切の外道によって分別される、涅槃・涅槃といわれるものは、なにもものの名称ですか。」と。

世尊はのたもした。「それでは実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、よく思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。もろもろの外道が涅槃を分別するときに、かれらの分別にしたがうものは、涅槃ではない。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

世尊はかれに次のようにのたもした。

さて、まず、マハーマティよ、(1) 或る外道の人々は、「〔五〕蘊、〔十八〕界、〔十二〕処が滅し、対象への貪著をはなれ、常住とちがった性質を見ることにより、心心所の聚合 (*kalpa*) が生起せず、〔また〕、過去と未来と現在の対



象を憶想せず、灯と種子と風とが「滅する」如く、因 (upādāna) が滅することにより、分別が生起しない。」と語る。そして、かれらにとって、そこに、涅槃についての理解がある。しかし、マハーマティよ、滅の見解によっては涅槃せず。(2)さらに、余の人々は、「対象にたいする分別が滅するときなどにおいて、風が「滅する」如く、他の場所の住所に到るのが、解脱 (mokṣa) である。」という。(3)さらに、余の外道の人々は、「知覚 (buddhi) が所知覚 (budhavya) を認知することが滅することによって解脱がある。」という。(4)また、余の人々は、「分別が生起しないとき、常と無常とを見ることがによって解脱がある。」と考える。(5)また、余の人々は、「種々の相 (nimitta) の分別は苦の生をもたらずものであると考え、唯自心所現を熟知せず、相 (nimitta) に恐怖をいだき、相を見て安樂を求めることによって」涅槃についての理解を生じている。(6)さらに、余の人々は、「内と外の一切法の自と共の相を了解し、過去・未来・現在が滅せずに存在することによって」涅槃を考える。(7)また、余の人々は、「我と衆生と命者と養者と神我とブドガラと一切法とが滅しないことによって」涅槃を考える。(8)また、マハーマティよ、愚かな理解をもてる余の外道の人々は、「世性 (prakṛti) と神我 (puruṣa) との区別を見ること、および、「三」徳が転変の作者たることによって」涅槃を考える。(9)また、余の人々は、「福 (puṇya) と非福 (apuṇya) とを完全に滅することにより」、(10)また、余の人々は、「煩惱の滅尽を知ることにより」、(11)<sup>p. 184</sup>また、余の人々は、「世間にたいする自在天の自力の作者たることを見ることによって」、「それぞれ」涅槃を考える。(12)また、余の人々は、「世間の生起は展転生起 (anyonyappravṛtta) であり、「自在天の如き」因よりの「生成で」ない。」といい、「因に執着する人は愚痴のために「世間の展転生起を」了解せず、それを了解しないかぎり、涅槃は存在しない。」と考える。(13)さらに、また、余の外道の人々は、「十六」諦の道を了解することによって」涅槃を考える。(14)また、余の人々は、「徳(属性)と有徳(実

体)とを明らかに知り、同一性と別異性と俱と不俱とを見ることによって」涅槃についての理解を生じている。(15) また、余の人々は、「自性としての〔諸法の〕生起をもって」涅槃を考える。すなわち、「孔雀の彩色や種々の宝庫や鋭いとげなどのような諸法の自性を見て」涅槃を考える。(16)さらにまた、余の人々は、「二十五諦の了解をもって」、(17)また、余の人々は、「プラジャーパーラ (Prajāpala, 生類の守護者) による六徳論 (śaḍguṇa-upadeśa) の理解をもって」涅槃を考える。(18)また、余の人々は、「時間が作者であるとながめ、世間の生起は時間によると了解することによって」涅槃を考える。(19)また、余の人々は、マハーマティよ、「有物 (bhava) をもって」、(20)また、余の人々は、「無物 (abhava) をもって」、(21)また、余の人々は、「有物と無物とを完全に知ることによって」、(22)また、余の人々は、「有物と涅槃との無差別を見ることによって」(智吉祥賢の註釈によると、この(22)はハ仏の定説Vとされ、中論第二十五章第二十偈が引用されている。)、〔それぞれ〕涅槃を考える。(23)さらに、また、マハーマティよ、一切智の師子吼を吼する余の人々は、次のように「考える」。「唯自心所現を了解し、外界の存在の執着と四句〔の執着〕とを離れた如実の状態を見、自心所現のものにたいする〔有・無の〕分別の二辺におちいらず、所取と能取とを把握せず、真実が一切の量によって不取不生であるとながめ、愚痴によって真実を理解しないことを放棄し、自内証の聖なる法に通達し、二無我を了解し、二煩惱をすて、二障を清め、地を高く高くのぼって、如来地において「幻」等のすべての禪定に入り、心と意と意識とを滅することによって」涅槃を考える。

かくして、究理論者である悪外道によって提示された余の「涅槃」は、すべて、道理を有せず、もろもろの智者によって棄てられるところのものである。マハーマティよ、かれらは、すべて、二辺におちいった感情をもって涅槃を考える。マハーマティよ、以上のような分別によって、一切の外道によって涅槃が考えられるのであるが、しかし、

そこに、何らのものも、生起せず、また、滅しない。マハーマティよ、一切の外道の涅槃は、自己の論書(sāstra)の知識によって考えられており、惑乱している。かれらによって考えられる如くに、『涅槃が』存在するのではない。意(manas)の生と滅と動揺とをもつては、いずこにも涅槃は存在しない。マハーマティよ、この点について、汝及び、余の菩薩摩訶薩は学ぶべきであり、一切の外道の涅槃の見解はしりぞけられるべきである。ここに、次のように説く。

(69) 涅槃の見解をもてる諸外道は、種々に『涅槃を』考える。かれらには、ただ分別のみがあつて、解脱の方便はない。

(70) 所縛と能縛とからはなれ、もろもろの方便よりはなれて、諸外道は解脱を考える。しかし、『かれらに』解脱は存在しない。

(71) 諸外道には、多くの差別した理趣が見られる。故に、かれらには解脱はない。『しかし』、何故に、もろもろの愚痴の人々によって『解脱』が考えられるのか。

(72) 果と因についての悪しき見解によって、一切の外道は惑わされている。故に、有・無の主張の論者であるかれらには、解脱はない。

(73) もろもろの愚人は言論の戯論をよろこび、真実にたいして広大な理解をしない。実に、言論は、三界の苦の母胎であり、実に、真実は、苦を滅する因である。

(74) 鏡に色が現るが、『実物として』存在しないように、もろもろの愚人によって習氣の鏡に心が『所取・能取の』二取に現るが、『実物として』存在しない。

(75) 心の顯現 (dṛśya) を完全に知らないから、分別が二種に生ずる。しかし、心の顯現を完全に知れば、分別は生起しない。

(76) 心 (citta) は実に種々 (citra) であるが、「真実には」所相と能相とをはなれている。もうもろの愚人によって分別される如くには、顯現の形相は顯現「の形相」として存在しない。

(77) 三有は分別のみ (vikalpa-mātra) であり、外界の対象は存在しない。種々の分別が現ずるが、「それらは分別のみのものとして」、もうもろの愚人によって明知せられない。

(78) それぞれの經典に、想 (saṃjñā) と名 (nāman) とのほかに、「分別」(vikalpa) が説かれる。しかし、能言 (能分別) をはなれるとき、所言 (所分別) は認知せられない。

(18) 仏陀たる自性

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、世尊に次のようにいった。「如来応供正等覺者である世尊は、仏陀みずからの仏陀たる自性 (svabuddha-buddhata) をわたくしに説いてください。それによって、わたくしと余の菩薩摩訶薩とは如来の自体をよく知るものとなり、自己と他の人々とを悟らしめるでありますよう。」と。

世尊はのたもうた。「それでは、実に、マハーマティよ、汝は「わたくしに」問うべし。わたくしは汝が耐えるが如くに、汝に説くであろう。」と。

マハーマティはいった。

世尊よ、如来応供正等覺者は、非所作のものですか、所作のものですか。結果となるものですか、原因となるもの

ですか。所相ですか能相ですか。能言ですか所言ですか。能知覚ですか所知覚ですか。このような、それぞれの語句の説明と世尊は異なるのですか、異ならないのですか。

世尊はのたもうた。

マハーマティよ、如来応供正等覺者は、以上の語句の説明のように、非所作のものでなく、所作のものでなく、結果となるものでなく、原因となるものではない。それは、何故かといえ、すなわち、ともに過失におちいるからである。もしも、マハーマティよ、如来が所作のものであるならば、「如来は」無常性となるであろう。「如来が」無常性であるならば、実に、あらゆる「所作の」結果は如来となるであろう。しかし、これは、わたくしと余のもしもの如来の認めないところである。しかし、もし、「如来が」非所作のものであるならば、「如来は」自体の得られないものとなるから、「如来の」完成した資糧が無意義となるであろう。<sup>p. 188</sup>「すなわち、如来は」非所作のものであるから、兎角の如く、また、石女の子にひとしいものとなるであろう。しかし、マハーマティよ、結果（所作）でなく原因（非所作？）でないものは、「常識的にいえば」、有でもなく無でもない。しかも、有でもなく、無でもないものは、四句 (catuskoti) より外なるものである。マハーマティよ、四句は世間の言説 (loka-vyavahāra) である。しかし、四句より外なるものは、石女の子の如き言葉のみ (vān-mātra) のものとなる。なんとすれば、マハーマティよ、石女の子は言葉のみのものであり、四句の中にはいないからである。「ところで、四句の」中にはいないとすれば、「それは」もうものの賢者が量 (pramāṇa) とすることのできるものではない。「マハーマティよ」、以上のように、一切の如来の句義は、もうものの賢者によって知られるべきである。

マハーマティよ、また「もうものの賢者は」、わたくしが「一切法は無我である。」と説いたところの意味をも了解

すべきである。マハーマティよ、無我なる存在 (nirātma-bhava) は、無我を性質とするもの (nairātmya) である。たとえば、牛と馬との如く、一切法は、自体 (svātman) として存在し、他体 (parātman) として存在しない。マハーマティよ、牛なる存在は「他なる」馬を体 (ātman) とするものでなく、馬なる存在は「他なる」牛を体 (ātman) とするものではない。それら二つは、有であって無ではなく、自相 (svalakṣaṇa) として存在しないのではない。実に、二つのものは自相として存在する。これと同様に、マハーマティよ、「無我なる」一切の存在は自相として存在しないのではない。実に、「自相として」存在するのである。しかし、もろもろの愚人によって、無我の意味が分別をもって理解されており、無分別をもって理解されていない。かくの如く、一切法の空と不生と無自性についても知るべきである。

また、如来は諸蘊より異なったものでなく、異ならないものでもない。もし、「如来が」もろもろの蘊より異ならないものであるならば、もろもろの蘊は所作のものであるから、「如来は」無常となるであろう。<sup>p. 188</sup> もし、「如来がもろもろの蘊より」異なったものであるならば、「如来と蘊との」二つがあるばあいには、牛「の左右」の角の如くに別様となる。いったい、一切法には類似性 (sādṛśya) が見られるから同一性があるが、短と長とが見られるから別異性がある。「たとえば」マハーマティよ、牛の右の角は左にたいして別異であり、左は右にたいして別異である。同様に短と長とは相互に「別異」である。同様にまた、種々の色彩は相互に別異である。しかし、如来は蘊と界と処より別異でもなく、また、別異でないものでもない。

同様に、如来は解脱より別異でもなく、また、別異でないものでもない。ただ、この同じ如来が、解脱という言葉によつて説かれる。もし、如来が解脱より別異であるならば、「如来は」色相を具し、色相を具するから無常なるもの

となるであろう。もし「如来が解脱より」別異でないならば、もろもろのヨーギンの「解脱を」証得する相の差別はないであろう。しかし、マハーマティよ、もろもろのヨーギンによる「解脱を証得する相の」差別が見られる。故に、「如来は解脱より」別異でもなく、別異でないのでもない。

同様に、「如来の」智は所知より別異でもなく、別異でないのでもない。実に、マハーマティよ、常にあらず、無常にあらず、結果にあらず、原因にあらず、有為にあらず、無為にあらず、知覚されるものにあらず、所相にあらず、能相にあらず、諸蘊にあらず、諸蘊より別異にあらず、所言にあらず、能言にあらず、同一性と別異性と俱と不俱とに關係しないもの、これは一切の量 (pramāṇa) よりはなれている。一切の量をはなれているものは、言葉のみ (vāṇ-mātra) のものとなる。言葉のみのものは不生であり、不生なるものは不滅である。不滅なるものは虚空に等しい。<sup>p. 190</sup>ところで、マハーマティよ、虚空は結果でもなく、原因でもない。しかも、結果でもなく、原因でもないものは、捉えられない (niralanbaya 攀縁をはなる)。捉えられないものは、一切の戲論を超えている。一切の戲論を超えているものは、如来である。これは、実に、マハーマティよ、正等覺たるものであり、これは、これ、仏陀の仏陀たる自性 (buddha-buddhatā) であり、一切の量と感覺器官よりはなれている。ここに次のように説く。

(79) 「仏陀は」、量と感覺器官とよりはなれ、結果でなく、原因でなく、能覺と所覺とをはなれ、所相と能相とをはなれている。

(80) 仏陀は、誰によっても何処にも、蘊をもって見られない。何処にも誰にも見られないものにたいし、いかにして、觀知があらうか。

(81) 「仏陀は」、所作でなく、非所作でなく、結果でなく、原因でなく、蘊でなく、非蘊でなく、また、その他のも

でもない。「それらは」雜亂のものであるから。

(82) 有として分別されつつ、見られないのではないものを、無しと理解すべきでない。「それが」実に、諸法の法性である。

(83) 無は有にともなわれ、有は無にともなわれる。故に、無しと理解すべきでなく、また、有りと分別すべきでない。

(84) 我と無我とに惑わされ、言語のみによるものは、かれらは、二辺に沈み、みずから破滅し、また、もろもろの愚人を破滅せしめる。

(85) 一切の過失pariよりはなれた、この道理をみるとき、かれらは、正しく觀察し、もろもろの導師をけがさない。

# (19) 不滅不生の意味

そのとき、マハーマティ菩薩摩訶薩は、さらにまた、世尊に次のようにいった。

読誦の教説の中で、世尊によって不滅不生(anirodha-anutpadā)という言葉(śrāvaṇa)が用いられ、汝(世尊)によって、「この不滅不生は如来の名(adhivacana)である。」と説かれたときに、世尊よ、世尊がかくの如くに語りたもうたところの、この不滅不生は無(abhava)であるのか、それとも、これは如来の異名(paryāyāntara)であるのか、世尊は「これを」わたくしに示してください。善逝は「これを」わたくしに示してください。世尊によれば、「一切法にたいしては」有・無の主張が見られないから、「一切法は不滅不生である」と説かれている。「しかし」もし、「一切法が不生である」といわれるならば、世尊よ、一切法は不生(ajāta)であるから、法(dharma)という言葉



葉は適合しない。もし、これが何らかの法の異名であるならば、世尊よ、それを説明してください。

世尊はのたもうた。「それでは、実に、マハーマティよ、汝はよく聞き、適当に思念せよ。わたくしは汝のために説くであろう。」と。「よきかな、世尊よ」と、マハーマティ菩薩摩訶薩は世尊に聴従した。

世尊は、かれに次のようにのたもうた。

実に、マハーマティよ、如来は無ではない。「如来は」一切法の不滅不生という言葉〔どうりの無なるもの〕ではない。しかし、また、「如来は」、「因」縁に関係すべきものでもない。わたくしは無意義に「不滅」不生という言葉を用いるのではない。マハーマティよ、これ（不滅・不生という言葉）は、如来の意成法身（manomaya-dharmakāya）の名であり、一切の外道と、声聞と、独覺と、七地に住する諸菩薩の境ではない。マハーマティよ、この「不滅」不生〔という言葉〕、これは、如来の異名である。たとえば、マハーマティよ、インドラ、シャクラ、ブランドラ、といい、ハスタ、カラ、パーニ、といい、タヌ、デーハ、シャリーラ、といい、プリトヒビー、ブフミ、ヴァスンダラー、といい、クハ、アーカーシャ、ガガナ、というように、もろもろの事物の一々のものに、多くの異名の言葉が考えられる如くである。しかし、それらのものに、自性がないのではないが、名が多いからといって、多くの自体が考えられるのではない如く、マハーマティよ、わたくしもまた、娑婆世界において三阿僧祇百千の名をもって、愚人の耳の範圍に來現するが、「名が多いからといって、多くの自体が考えられるのではない」。ところが、かれら（愚人）はそれら（百千の名）によってわたくしを語るのであるが、それらの名が如来の異名であると知らない。マハーマティよ、或る人々は、わたくしを如来であると知る。或る人々は「わたくしを」自存者（svayambhu）〔と知り〕、また、或る人々は、導師（nāyaka）、偏導（parināyaka）、明導（vināyaka）、仏陀（buddha）、仙人（ṛṣi）、牛王（vriśaha）、

梵 (Brahmana) ˆ ビシヌス (vīṣṇu) ˆ イーシヤハナラ (īśvara) ˆ 自性 (pradhāna) ˆ カヰラ (kapila) ˆ 真実辺 (bhūtanta) ˆ  
ぎずつけられなゝもの (aiśīa) ˆ ネーミン (nemin) ˆ 月 (soma) ˆ 日 (bhāskara) ˆ ラーヤ (rāma) ˆ ヴァーサ  
(vyāsa) ˆ 鸚鵡 (śuka) ˆ インドラ (indra) ˆ バリン (balin) ˆ ヴァルナ (varuṇa) ˆ と知る。また、他の或る人々は、  
不滅・不生・空性・如性・諦性 (savyatā) ˆ 如実性・實際<sup>p. 193</sup>・法界・涅槃・常・平等性・無一・無相・解脱・道・諸諦・  
一切智・勝者・意生身、と知る。マハーマティよ、かくの如き等の不増不減なる三阿僧祇百千の名をもって、人々は  
この世間とかの世間に充滿しているわたくしを知る。しかし、人々は二辺に墮した心をもって、「わたくしを」水中  
の月の如くに不入・不出なるものと了解しない。

「かれらは」、わたくしを尊敬し、称讃し、恭敬し、供養するが、言葉の意味と解釈とを正しく知らず、「わたくし  
の」名称の特殊な独自の道理を知らない。教説の言葉と説誦とに執着し、不滅不生を無であると考えるのであるう。イ  
ンドラ、シャクラ、プラランダラの如くに、「不滅不生を」如来の名の別名であると考えない。一切法にたいする言  
葉のままの意味の説誦にしたがうために、独自の道理を成立する教説を信じない。かくして、マハーマティよ、かれ  
ら愚痴の人々は「言葉 (ruta) のままに、実に、意味 (artha) があり、意味は言葉より不異である。」と語る。こ  
れは、何故かといえは、意味には体 (sarīra) がないから、言葉は意味より異なったものではない、言葉こそ、実に、  
意味である、と「語るのである」。マハーマティよ、賢明な理解をもたない人々は、言葉の自性をあまねく知らない  
ために、言葉は生滅する (utpanna-pradhvamsi) が意味は不生不滅である、と知らない。マハーマティよ、言葉は文  
字におちいるが、意味は文字におちいらず、有と無とをはなれているから、生がなく体がない。マハーマティよ、も  
ろもろの文字は有・無をもって不可得であるから、諸如来は文字におちいった法を説かず、文字におちいらぬ法を説

く。また、マハーマティよ、法には文字がないから、文字におちいった法を説く人は、矛盾したことをいう人である。故に、この理由によって、マハーマティよ、読誦の教説の中に、わたくしと他の仏・菩薩によって「諸如来は一字と雖も、宣べたまわず、語りたまわず。」といわれたのである。これは、何故かといえば、諸法にたいしては文字がないから、「諸如来は」、意味を有しない「文字」を宣べたまわないからである。ただ、実に、分別「の立場」をとって「諸如来は文字を」宣べたものである。分別「の立場」をとらずしては、マハーマティよ、一切法にたいする教法の破壊があろう。教法が破壊するとき、仏と独覺と声聞と菩薩は無となるであらう。それらが無となるときは、何が誰れに示されるのであるか。故に、この理由によって、マハーマティよ、菩薩摩訶薩は教説の読誦の言葉に執着すべきでない。マハーマティよ、かの教説の読誦は衆生の性向にしたがって起ったものであるから、第二義的なもの(vyabhiṭṭin)である。種々の傾向をもった衆生にたいして、「かれらの」心と意と意識とを退けるために、わたくしと余他の如来応供正等覺者によって教説がなされる。しかし、聖なる自内証の智慧の獲得の成立という意味で「教説がなされるので」はない。ただ、一切法の無相と唯自心所現とを了解せしめ、二種の分別を退けるためである。マハーマティよ、菩薩摩訶薩は意味を信賴(pratīṣṭraṇa)すべきであり、文字を信賴すべきでない。マハーマティよ、文字に従う善男子もしくは善女人は、自らを破壊し、他を了解せしめない。一切法と地の自相(bhūmi-svalakṣaṇa)とを熟知せず、言葉と解釈とを知らず、悪見におちいった心をもった、もうもうの悪外道によって、かれらは自宗を混乱せしめられる。

もし、一切法と地の自相とを熟知し、語句の異名と解釈に通達し、ものの意味と道理とを熟知するときは、そのために、自らを正しい無相の樂によって悦樂せしめ、他を正しい大乘に住せしめる。マハーマティよ、大乘が正しく撰

受されるとき、仏と声聞と独覺と菩薩とが摂受される。仏と菩薩と声聞と独覺とを摂受することによって、一切衆生が摂受される。一切衆生を摂受することによって、正法が摂受される。マハーマティよ、正法を摂受することによって、仏種(Buddha-variṣa)を断じない。仏種を断じないことによって、勝妙の場所を得ることが智見される。かくして、これらの勝妙の場所が得られるとき、菩薩摩訶薩は、生(nupapatti)をえ、大乘に住することによって、十力をもって種々の色と相貌とを持つものとなり、衆生の相貌と随眠の相を熟知するものとなり、如実に法を説く。

さて、如実と不変異性と真性と不取と不捨との相と一切の戲論の寂滅とは、真実といわれる。故に、マハーマティよ、真実にたいしては文字がないから、善男子もしくは善女人は、言語のままの意味に執着することに精通すべきではない。指(aṅguli)を見るべきでない。マハーマティよ、指をもって何人かが何人かに何物かを指示すれば、かれは指の尖端を見ようとするであろう。かくの如く、実に、マハーマティよ、愚かを自性とする愚人の類は、言語のままに指の尖端に執着して死にいたり、言語のままの指の尖端の意味を捨てて、勝義を了解しようとしな。マハーマティよ、もろもろの愚人の食物と飲料は、調理(abhisaṅkṛta 作為)されずしては、何人も食わない。もし、何人が調理されないものを食うときは、食物の正当な調理を知らないから、かれは狂乱者なりと考えられるであろう。かくの如く、実に、マハーマティよ、不生不滅は作為(『言説』されずしては輝かないから、決定して、そこに、作為がなされるべきである。しかし、指の尖端の言葉の意味を見る如くに、言語のみ(vāmatra)「にしたがうべき」ではない。故に、この理由によって、マハーマティよ、意味に<sup>p.197</sup>たいして努力すべきである。マハーマティよ、意味は「知覚を」超越したものであり、涅槃の因である。言語は分別と結合したものであり、輪廻をもたらすものである。マハーマティよ、意味は多聞の現前より得られる。マハーマティよ、多聞とは、すなわち、意味に精通することであ

り、言語に精通することではない。ところで、意味に精通するとは、一切の外道の論議にまじわらないところの見解である。自ら墮せず、他をも墮せしめないとき、かくの如きとき、マハーマティよ、意味にたいして多聞である。故に、意味を求めるものによって、それら（多聞）が尊敬されるべきである。これに反するものは、言語のままの意味の執着であり、それらは、真実を求めるものによって捨てられるべきである。

「ここ」で、さらに、また、マハーマティは、仏陀の加被力をこうむって、次のようにいった。

「世尊よ」、世尊の不滅不生の見解には、何ら特色がありません。これは、何故かといえば、世尊よ、一切の外道の因 (kāraṇa) も不滅不生であり、また、汝の虚空と非択滅と涅槃界も不滅不生であるからです。また、世尊よ、もうもの外道も、因 (kāraṇa) と縁 (pratyaya) とから世間が生ずると語っているが、世尊もまた、縁 (pratyaya) というかの「外道の」因の他の別名をかかげ、無明と愛と業と分別の諸縁から世間が生ずると語りました。また、かれらと汝とは、外の諸縁によって外の諸存在が生ずるという点で、相等的い。世尊よ、それゆえに、この「世尊の不滅不生の」論は、外道の論と差別されません。九実 (navadraya) を有する微塵 (anu) と自性 (pradhāna) と自在 (īśvara) と生主 (prajāpati) などのものは不滅不生ですが、世尊よ、汝にとっても、一切諸法は有・無をもって不可得ですから不滅不生です。また、大種 (bhūta) は滅壊しないから、自相が不生不滅です。大種はそれぞれの趣に往くけれど、大種の自性をすてません。世尊よ、大種のこの転変の分別は、一切の外道によっても、汝によっても、考えられています。故に、この理由によって、この「世尊の不滅不生の」論には特色がありません。如来の論に特色があり、一切の外道の論に特色がないような、特色が語られるべきです。しかし、世尊よ、「世尊」自らの論に特色がないときは、不滅不生を理由として、外道もまた、仏陀ということになる。「そうすると」、「一世界に多くの如来が出

現することは、そのことわりなく、余地なし。」と世尊によって説かれておりますが、「汝は」有・無をもって「不可得？」の所作を承認するから、「汝」自らの論に特色がないかぎり、これは、如来が多いということになる。「ではありませんか」。

世尊はのたもつた。

マハーマティよ、わたくしの不生不滅は外道の不生不滅の論と等しくない。また、生と無常の論とも等しくない。これは、何故かといえは、実に、マハーマティよ、もろもろの外道にとって、存在の自性は不生・不変 (anuppanna-avikāra) の相をえているが、しかし、わたくしは、このように、有・無の宗におちいらない。マハーマティよ、わたくしにとって、「ものの自性は」、有・無の宗をはなれ、生と滅とをはなれ、幻と夢との種々の色の顕現の如くに、存在 (bhava) にあらず、非存在 (abhava) にあらず。いかにして、存在にあらず非存在にあらずかといえは、「わたくしは」、もの (rūpa) の自性の相を、顕現・不顕現として、また、取・不取として執着しないからである。この故に、一切の存在は、存在にあらず、非存在にあらず。しかも、唯自心所現を了解することによって分別が生起しないとき、世間は、自らの本来の状態に住し (svastha) 作用をはなれる (niskriya)。もろもろの愚人は「世間が」作用をもつと分別しているが、しかし、もろもろの聖者はそうではない。マハーマティよ、かれ (世間) は、ガンダルヴァ城と幻人の如き、虚妄の境であり、分別の迷動 (vibhrama) である。たとえば、マハーマティよ、愚かを自性とするものは、或るガンダルヴァ城の中に、種々の幻人や商主 (sārtha) が、入りつつ、あるいは、出でつつあるのを分別するであろう。「かれらは入り、かれらは出でたり」と。しかし、そこに、何ら入ったものはなく、また、出でたものもない。まことに、これらは、かれら (愚かを自性とするもの) の分別の迷動の存在にすぎない。かくの如く、

マハーマティよ、かの生と不生とは、もろもろの愚人の迷動である。幻人の生起の如く、そこに、何らなされたものも、なされないものもない。幻人は、存在としても非存在としても、何ら作用のないものであるから、生ずることも、滅することもない。実に、一切法は、かくの如く、滅と生とはなれてゐる。しかるに、もろもろの愚人は、非真実におちいった想念をもつて、生と滅とを分別する。しかし、もろもろの聖者はそうでない。

この中、非真実(viṛtha)とは、マハーマティよ、存在の自性が分別される如くに「真実に」あらず、しかも、別様にも「真実に」あらず、ということである。別様に(「分別されない如くに」)分別されるときにも、一切の存在の自性の執着になるから、<sup>p. 200</sup>「そこに」遠離の智見がない。遠離の智見がなくては、分別の止滅がないであらう。故に、マハーマティよ、無相の智見(animita-darsana)は勝れているが、有相の見解(nimita-darsana)はそうでない。また、有相は生(janman)の因であるから勝れていない。マハーマティよ、無相とは分別が生起しないことであり、不生が涅槃であると、わたくしは語る。この中、マハーマティよ、涅槃とは、如実なる意味の状態を智見することであり、心・心所の聚合である分別の転換にともなわれる、如来の聖なる自内証智の証得こそ、涅槃であると、わたくしは語る。

(20) 不滅不生—因縁の和合、聚合

ここに、次のように説く。

(86) 生の「見解」をしりぞけるために、不生を成立せしめる無因論(ahetuṇvāda)をわたくしは語る。しかし、もろもろの愚人によっては知られない。

(87) これら一切は不生である。しかし、諸法は存在しないのではない。ガンダルヴァ城・夢・幻としての顯現である無因の諸法が存在する。

(88) 「これら一切が」いかにして、不生・無自性・空性であるかを、汝、我れに語るべし、「といわば」、存在が「諸縁の」和合 (samavaya) をはなれたばあいには、知覚に把握せられない。故に、空・不生・無自性なりと、わたくしは語る。

(89) また、「諸縁の」和合の一々は、見ゆるものでないから存在しない。「しかし、諸縁の」和合は、外道の見解の「如く」不滅なるもの (apralaya) として存在しない。

(90) 夢と毛輪と幻とガンダルヴァと陽炎とは、無因<sup>pa</sup>にして現ずる。世間の種々の状態もかくの如し。

(91) 無因論によって「有因論を」折伏して (usiritya) 不生を成立せしめる。しかし、不生が成立しても、わたくしの道理は滅しない。

○ 無因論が説かれるとき、如何にして、何者によって、何故に、何処に、無因の生起があるのか、と外道の怖畏が生ずる。(この偈は、(91)と(92)とにまたがっているが、一偈としてかぞえるべきである。)

(92) 有為を因より生じない無因のものと見るときに、そのとき、滅と生の論義の見解がしりぞけられる。

(93) 不生は無であるのか、または、縁に觀待するものであるのか、または、これは、存在の名称であるのか、無意味なものであるのか、我れに語るべし、「というならば」。

(94) 不生は無ではない。また、縁に觀待するものでもない。また、これは、存在の名称でもない。また、無意味な名称でもない。



(95) 声聞と独覺と外道と、七地に達したものの境界でないところ、そこに、不生の相がある。

(96) 因縁をしりぞけ、作者を滅した、唯心の状態を、わたくしは不生であると語る。

(97) もろもろの存在が因より生ぜず、所分別と能分別とをすて、有・無あるなしの宗を遠離したのが、不生であると、わたくしは語る。

(98) 心の顯現を遠離し、二つの自性(所取と能取)をすて、所依を転ずることが、不生であると、わたくしは語る。  
(99) 外的な存在でなく、非存在でなく、また、心の把握するところのものでなく、一切の見解をはなれたもの、これが、不生の相である。

(100) かくの如くに、空、無自性などの一切の句を示すことができる。決して、空をもって空ではない。不生の空をもって「空」である」。

(101) 諸縁の聚合 (kalāpa) が生じ滅する。聚合より分離したものは、生ぜず滅せず。

(102) もろもろの外道によって、一 (ekatva) ・異 (prithaktva) をもって分別される如く、存在は聚合と一としても異としても、何処にも存在しない。

(103) 有無の法は生じない。有無でないものは何処にも存在しない。実に、かの聚合は、これらに異って、生じ滅する。

(104) これらは、表象のみ (sañheta-mātra) である。相依相待 (anyonyāpekṣa) の聚合 (saṃkalā) である。諸縁P. 203の聚合をはなれて、所生の境は存在しない。

(105) 「諸縁の聚合をはなれて」所生の境が存在しないから、「所生の境は」不生であり、外道の過失をはなれている。

わたくしは「諸縁の」聚合のみを説く。しかし、もろもろの愚人によって知られない。

(106) 聚合と別に、何処かに所生の存在があるという人は、聚合の破壊者である無因論者であると、知られるべきである。

(107) 聚合と別に、何処かに何らかの存在があるならば、聚合は実体的なあり方 (dravya-jāti) をあらわしだす灯火であらう。

(108) 聚合と別に、智慧のないものによって分別される諸法は、実に、無自性であり、不生であり、本来、虚空の如し。

(109) もろもろの聖者の得た法性は、これは別の不生であって、生が不生であるときに、それが、不生忍 (anutpade-ksāntiḥ) である。

(110) この一切の聚合の世間を、「これは聚合のみ」と見るとき、心は三昧に入る。

(111) 無知、愛、業などは、内的なる聚合であり、棒、泥、器、輪など、及び、種子、大種などは、外的〔なる聚合〕である。

(112) 他の縁によって、存在がいづこかに生じ、「これは聚合のみ」と見られないとき、かれらは理と教とに住しない。

(113) <sup>p. 204</sup> もしも、所生の存在が無いならば、「その存在にたいする」知覚は何の縁から生ずるのか、実に、それら（所生の存在と知覚と）は相互に生ぜしめるものである。故に、それらは、縁となづけられる。

(114) 煖、湿、動、堅の諸法がもろもろの愚人によって分別される。しかし、この聚合は法 (dharma) にあらず、故

に、実に、無自性である。

(115) 医師は病気にしたがって種々の所作をなす。しかし、医典の差別があるのではない。病気の差別によって「差別」がある。

(116) かくの如くに、わたくしは、煩惱の過失によって汚された衆生の心相統と諸根の力とを知って、もろもろの衆生に教法を説く。

(117) 「しかし」、煩惱と根との差別によって、わたくしの教説は差別せられない。寂靜なる八支の道は、一乗である。

## (21) 無常について

そのとき、実に、マハーマティ菩薩摩訶薩は、またまた、世尊に、次のようにいった。

世尊よ、「無常、無常」と、一切の外道によって考えられております。また、汝（世尊）によっても、一切の言教の中に、「嗚呼、諸行は無常にして、生滅の性質あるものなり。」と説かれておりますが、世尊よ、これは真実でありますか、非真実でありますか、どうですか。世尊よ、無常には、いかほどの種類があるのですか。

世尊はのたもつた。

マハーマティよ、一切の外道によって八種の無常(anityata)が考えられている。しかし、私は考えない。八種は何かというと、この中、マハーマティよ、(1)或る人々は、次のようにいう。「発動(prārabha)の滅が無常である。」と。マハーマティよ、発動というのは、生(utpada)であって、その不生が無常なのである。(2)或る他の人々は、「形相(samsthāna)の滅が無常である。」という。(3)或る他の人々は「色(rūpa)が無常である。」という。(4)或る他の

人々は、「色の変異 (vikāra-antara)」、すなわち、一切法が無間に相続することにより、自らの要素 (sva-rūpa) を滅し分離することが、無常である。」という。たとえば、乳より酪が転変し変異する如く、一切の存在において、見られずに滅する無常が生起する、というのである。(5) また、或る人々は、「存在 (bhava) が無常である。」と考える。(6) 或る他の人々は、「存在の無が無常である。」と考える。(7) 或る他の人々は、無常が一切法の中にふくまれるから、「一切法が不生であるのが無常である。」と考える。

この中、マハーマティよ、(6)「存在の無が無常である。」というのは、すなわち、大種と大種所造の自相が滅壞して不可得であり、大種の自性が生起しないことである。

この中、(7)「不生が無常である。」というのは、すなわち、一切法が常に無常であり、有・無として生起せず、乃至、極微の分析にいたるまで、不可見であることである。この不可見は、不生の名称であって、生の名称ではない。実に、マハーマティよ、これが、不生が無常である相であって、これを了解しないから、一切の外道は生が無常であるという論議におちいるのである。

さらにまた、マハーマティよ、(5)「存在が無常である。」と主張するのは、自己の理解による分別であり、もろもろの存在は常でなく無常でない。これは、何故かといえば、無常は、それ自身、滅しないものであるからである。このばあい、マハーマティよ、一切の存在の無は、無常の果であり、無常なくして、一切の存在の無は知られない。「無常と無との関係は」、棒や石や槌のいづれかによって、打たれ、かつ、打つ如し。「しかし」、経験上、「無常と無とは」たがい差別なくあらわれている。故に、無常は因であり、一切の存在の無は果であるが、これは無常、これは果であると、因果が差別されないから、因果の差別は存在しない。存在が「無常という因のない」無因なるものである

れば、一切の存在は常である。マハーマティよ、一切の存在の無は有因であるが、もろもろの愚夫異生は了解しない。因は不相似の果を生じない。もし、生ずるならば、それら一切の存在には、無常と不相似の果があるであろう。しかし、果と因との区別はない。経験上、果と因との区別が見られるにすぎない。

もしも、それら「一切の存在」に無常という存在 (bhava) があるならば、作用 (kriyā) と因体 (hetubhāva) と相 (lakṣaṇa) とにおちいるであろう。あるいは、一切の存在の中、一つの存在をもってみたされるであろう。作用と因体と相におちいるから、無常は、それ自身、無常となる。無常が無常であるから、一切の存在は常になり、常性になるであろう。

もしも、無常が一切法の中にふくまれるならば、それによって、「無常は」三時におちいるであろう。この中、過去の色 (『無常』は、それとともに滅壊する。未来「の色」は、色が不生であるから、生じない。現在「の色」は、その色と異なる相のものである。色はもろもろの大種の状態の差別 (sāmniveśa-viśeṣa) であって、もろもろの大種にぞくする大種所造の自性は滅壊しない。異と不異とはなれているからである。一切の外道にとって、一切の大種は滅壊しないから、三有はすべて大種と大種所造であって、そこに、生と住と異とが施設される。もろもろの外道によって無常が考えられるような、大種および大種所造とはなれた、別の無常なるものが、いかにしてあろうか。諸大種は、自性の相が滅壊しないから、生ずることなく滅することなし。

この中、(1)「発動の滅」となづけられる無常は、諸大種がさらに他の大種を発動せず、たがいに、相を異にし、それ自身の相をもって、差別が発動されないことである。それら「諸大種」が、かれ（発動）の差別なく、さらに発動することなく、「別々の」二相を有するという点で、無発動の無常という理解になる。

この中、(2)「形相の滅」となづけられる無常は、大種と大種所造とが、乃至、崩壊(*pralaya*)するにいたるまで滅することである。崩壊とは、マハーマティよ、極微(*paramāṇu*)にいたるまで分析して觀察することである。滅(*vināśa*)とは、大種と大種所造の形相に変異が見られることによって、長短が不可得であることであり、諸大種が滅するときに、諸大種の中に極微はない。「この」形相の滅の見解によつては、数論(*sāṅkhya*)の論におちいる。

この中、(3)「形相の無常」となづけられる「無常」は、およそ色が無常であるような、<sup>p.208</sup>形相の無常であつて、諸大種の「無常」ではない。もしも、諸大種に無常があらならば、世間の言説(*loka-saṁvyaḥara*)は無とならう。世間の言説が無となるばあいには、一切の存在が言葉のみ(*vāgmatratva*)にすぎないことになり、しかも、自相の生(*svalakṣaṇa-utpatti*)が見られるから、ローカーヤタの見解におちいることになる。

この中、(4)「変異の無常」となづけられる「無常」は、色の変異(*anyathabhūta*)についての見解であり、諸大種の「変異についての見解」ではない。黄金の形相と装飾との変異についての見解の如し。「黄金は」黄金の自体として滅しない。しかし、装飾と形相との滅がある。

また、(8)余のものは、以上のような変異「の見解」におちいつており、また、以上のような種々相をもつて、もろもろの外道によつて無常の見解が分別されている。「かれらによれば」、もろもろの大種は火に焼かれても、自相として互いに焼かれない。自相をはなれることによって、大種と大種所造の存在が滅せられる、「と考えられる」。しかし、マハーマティよ、わたくしにとつて、「諸大種は」常にもあらず無常にもあらず。これは、何故かといえど、外界の存在を承認せず、三有を唯心と説き、種々の相を説くことがないからである。「すなわち、わたくしにとつて」、大種の状態の差別(*saṁniवेशa-viśeṣa*)は、生ずることなく滅することがない。また、大種と大種所造として、

分別が二つに生じない。所取と能取の相をはなれ、分別の二つの生起をあまねく知り、外界の有と無との見解をはなれ、唯自心所現を了解するから、分別が分別の形態 (vikalpa-abhisamskāra) <sup>p.210</sup> をもって生じ、無形態 (anabhisamskāra) では生じないのである。心と分別と有と無とはなれ、唯自心所現を了解するから、世間と出世間と出世間上上の一切法に、常もなく、無常もない。「しかし」、二辺の悪見におちいった心を持ち、不完全にもなわれた、一切の外道の人々によって、無常の論議が分別される。マハーマティよ、言語と分別とを超越した、世間と出世間と出世間上上の一切法の三種の相を、一切の外道と愚人たちは了解しない。ここに、次のように説く。

⑪⑧ 発動の滅と、形相の変異と、有と色とが、無常であるとして、もろもろの外道は分別し、まどっている。

⑪⑨ かれら外道は、もろもろの存在には滅がない、もろもろの大種は大種の自性をもって住する〔といい〕、種々の見解に倫没し、〔しかも〕、無常を分別する。

⑪⑩ 外道にとっては、何ものの滅もなく、生もない。大種が大種の自性をもって常であるときに、いかにして無常を分別するのか。

⑪⑪ これら一切は唯心なり。心が所取・能取の状態をもって二として生起し、我と我所とは存在しない。

⑪⑫ 梵 (brahman) <sup>p.210</sup> などの住处にいたるまで、唯心であると、わたくしは語る。唯心をはなれて、梵などは成立しない。

以上、入楞伽大乘経の中、無常品第三。

## 梵文訂正

( ) のなかの数字は南条本の行数を示す。

- p. 136 (13) viṣayābhāva→viṣayabhāva (14) manaso→不要 p. 138 (12) māṭṭitvenotiṣṭate→māṭṭitvenopatiṣṭate  
 (15) samudghātād→upaghātād p. 140 (1) bhāvanā→不要 (8) antara→antaro (10) bhagavānbuddhānām→不要  
 p. 142 (15) samudgataḥ→samaṅgataḥ p. 143 (7) katamat→katamā yaduta yat (10) vanme→vartma p. 144  
 (2) patha→pathena p. 145 (9) astitva→astitvaṁ (15) muktatvādividyante neti || katamo→muktatvād || vidyante  
 neti katamo p. 146 (5) ananyatvāc→ananyānupalabdhitvāc (11) asti→不要 (16) ānitya→ānitya p. 147 (16)  
 adhyeṣate | →adhyeṣate sma | p. 148 (12) bhūmigati→不要 (13) tāms→tarka p. 150 (10) pravartate | nṛiṇām  
 →pravartate nṛiṇām | p. 151 (10) viṣayama→viṣama (11) āśraya→不要 (13) vāicitrya→vāicitryaṁ p. 152 (5)  
 abhivini→abhiniveśavini (7) āśrayāḥ→āśayāḥ (10) tryādabhi→tryābhi p. 153 (7) niścitaṁ→niścittaṁ (12) bhā-  
 vajam→bhājana p. 155 (3) bhūmi→bhūmibhūmi p. 156 (5) skandhāiḥ→skandheṣu (8) dṛiṣṭyāḥ→dṛiṣṭāḥ  
 p. 157 (1) pannapradh→pannāpradh (3) astivāici→astipatitaṁ vāici (15) kṣayo→kriyo (16) asaṅga→asaṅgati  
 p. 158 (13) abhāva→ābhāsa (15) matā→amala? p. 159 (4) sadasatpakṣotpāda→ātmasadasadutpāda? (14) vikalpa-  
 sya pariṇāmo→不要 p. 161 (2) sarvabhūmiṣu→sarvadharmeṣu (5) anyathā→artha (15) bhūmyabhūmi→  
 bhūmibhūmi p. 164 (11) svabhāvānavabodhāt→svabhāvāvabodhāt (14) hetu→不要 p. 168 (10) nirvikalpāśca  
 →nirvikalpāmśca p. 170 (4) yogavad→yogāt (8) tan→不要 (8) nājñānam→不要 (14) prapañcavāsita→prapañca-



vāsanāvāsita p. 171 (7) sāmīpyam→sāmīpyāt p. 175 (4) deśyate | sva→deśyate sva (8) mohohāl→mohāl  
p. 177 (5) yadi→不要 (6) brāhmaṇa→不要 (14) anye→anyā p. 178 (14) cadṛiśyate→不要 (18) to brāhmaṇa→to  
bho brāhmaṇa p. 179 (1) darśanam→不要 dṛiśṭiḥ sthānaṃ→dṛiśṭisthānaṃ (2) sattvānām triśnīyaḥ→saṃdhis  
triśnāyaḥ? p. 180 (17) anadhiṣṭhā→aniṣṭhā p. 181 (6) bhaṅgadarśanā→bhaṅgādarśana p. 182 (3) kāryasya  
darśanam→kāryānidarśanam p. 184 (4) nirvāṇaṃ kalpayanti→nirvāṇaṃ nāstīti kalpayanti (16) abhāvan→不  
要 p. 185 (6) vyāvṛitte→vāvritter (15) śikṣitvā→śikṣitavyā p. 187 (6) svakuśalā→svarūpakuśalā p. 189  
(6) vāicitryataśca | ataścāparasparato'nyo no cānyas→vāicitryaśca parasparato'nyo na cānyo nānanyas p. 191  
(1) man→tan p. 193 (2) mārga→mārgaṃ (5) saṃjānanta udaka→saṃjānanti | udaka (6) nirgatam | na→  
nirgataṃ ca (16) iti ruta→iti | ruta (17) yaḥ | na→yaḥ na p. 194 (4) akṣarapati→akṣarāpati p. 195 (3) parā-  
rthāśca→parāmśca p. 196 (1) viśeṣa→veṣa (4) kulaputreṇa→kulaputrā (12) bālānām ca→bālānām na ca  
p. 199 (1) darśanavannābhāvaḥ | kathaṃ→darśanavat | nābhāvaḥ kathaṃ p. 201 (6) nāhetuko na hetubhyo→  
nāhetukamahetutvaṃ (cf. 偈頌品 p. 338) (16) ahetuvṛittir→ahetuvṛittiṃ p. 202 (2) cittaṃ dṛiśya→cittadṛiśya  
(5) 不要 (13)? p. 206 (12) vibhāgasteṣāṃ | yadi→vibhāgaḥ | teṣāṃ yadi p. 207 (10) anityatā→anityatāyās  
p. 207 (14) anulabdhi→anupalabdhi p. 208 (4) na→不要 (15) vikalpasya→vikalpo p. 209 (2) lokottaratamānām  
→lokottaralokottaratamānām (3) mātrānavabodhāt→mātrāvabodhāt (12) nityatām→anityatām